
Alice in dream world **死神の風に吹かれて**

くるくる童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Alice in dream world 死神の風に吹かれて

【Nコード】

N5039Q

【作者名】

くるくる童子

【あらすじ】

叶えられなかった夢は狂い、そして悪夢となった。忘れられたくない。その願望から、「アリス」達を自分の中に引き込む。誰にも知られないまま、夢は大きくなっていく。「アリス」達は夢の狂気に犯され、さらに夢は狂っていく・・・そんな中、やや冷酷で冷静なだけの理系で普通？の青年、天鐘風斗は神の頼みにより、アリスを救い、狂った夢をどうにかするために夢の中に送り込まれる。神の全ての力を使って夢に干渉し、風斗が送り込まれた夢の中は、剣

と魔法の世界であつた・・・ この作品は、歪Pの「人柱アリス」を基本としたシナリオになっています。基本的に主人公は最強です。戦争、流血などの表現もあります。以上のことに不快感を覚える方はお帰りください。

まえがきとお詫び

どうも、初めまして。cameと申します。

この『Alice in dream world 死神の風に吹かれて』（旧Alice in magic war）は、

- ・神話の神（主にギリシャ）の登場（かなり捏造と妄想が含まれる）
- ・主人公最強、無双（ただし戦闘描写は下手）
- ・厨二病（しかもセンスが無い）
- ・さまざまな用語（主に科学、兵器など）

等の要素が含まれております。

「ちょっと無理……そういうのマジで無理……」

という方は、あせらず、ブラウザの「戻る」ボタンを押してください。

3

「まあ、我慢してやるよ。」

という方、ありがとうございます、そのままお進みください。

また、基本更新は週1となっておりますが、リアルが忙しいと更新ストップになる可能性もあります。

できるかぎり努力はいたしますので、どうかよろしくお願いします！

5・30 追記 結局不定期更新となってしまいました…できる限り早く復帰します…

第0幕 狂いだす夢

人は誰でも「夢」を見る。

その夢を叶えるため、必死になって努力する。

その夢はそれぞれ違うかもしれない。

結局は同じ夢でしかない。

ある「夢」がこう言った。

「僕はとうとう叶えられ、栄光の光を浴びることが出来た。」

また、ある「夢」はこう言った。

「私は最後まで叶えるために全てを捧げられた。」

どうして、と呟く。

最初は必ず、みんな叶えるために必死で働く。

でも、いつしかそれは働くことが目的になっていて、

「嫌だ・・・消えたくない・・・」

いつの間にかみんな忘れてしまう。

忘れられたくない、そう呟いて、

目から雫が零れ落ちる。

忘れられたくないのなら、忘れさせなければいい。

それしか考えられなくしてしまえばいい。

さあ、カレヲヲミチビコウ。

そして僕は、悪夢と手を結んだ。

第0幕 狂いだす夢（後書き）

初投稿です、cameです。

まずは、お礼と謝罪を。

歪P様、連絡すらせず、勝手に作品を使って申し訳ございません。初心者二次創作だと思って笑って許していただけると嬉しいです。尚、ほぼオリジナルになるため、リアルで複数の方から「オリジナルでいいと思う」とのご意見をいただき、10・30よりオリジナルとして掲載しています。原作（原曲？）に入るのにはまだ時間がかかりますし、入ってからまた検討しようかと。

それでは次に、予告です。

次回は主人公が神様とお話します。

・・・精神病院行きな意味ではなく、対談するんです。
・・・テンプレですね、すみません。

また、私はあまりタイピング速度が早くないため、何かコメントをいただいても返信はきつと遅くなってしまうと思いますが、是非コメントいただけると嬉しいです。

では、誠心誠意頑張らせていただきたいと思います。

第1幕 空白世界と幼き子

真っ白な世界。上、下、右、左、前、後ろ。全てが分からない。はて、自分はさつきまでクレーのよく利いた部屋でゲームのプレイにいそしんでいたはず。

魔方阵に飛び込んだ覚えもないし、かといって危険な薬品に脳がやられたわけでもない。

「ねえ」

つまり、これはゲームをやりすぎて脳が目かのいずれかをやられたことになるのか？

しかし、まだ始めて1時間程度だったはず。いたって健康な高校生2年の自分にその可能性は無い。

「おい」

もしかしたらこれは、新種の蚊か何かが菌を持っていて、それに刺される事によってこのような状態なのだろうか。

だとすれば、これは一大事である。国家に連絡し、早急にワクチンを精製、対策を練らなければならない。

「……え、無視？ それは無いよね、普通」

いや、大体これは治るものなのか？

そもそも回復しなければ連絡なぞ取りようも無い。一体どうしたものか……。

「無視すんなやゴルァー!!」

複雑に絡んで迷路となりかけた思考は後頭部を跳び蹴りしてきた
幼い少女、所謂幼女によって中断させられた。

「初対面の人間に、しかも後頭部に跳び蹴りは無いと思うぞ」

「今までずっと観察してきたんだもの、初対面ではないさ！」

「無い胸を張りながら言うな。そしてそれは一方的なものだろう？
お前はテレビで何度も見ているからといって俳優にため口で話しかけるのか？ 大体観察って何だ。電波系か、お前は」

飛び蹴り幼女は言葉に詰まる。

白いローブのようなものを着ていて、幼稚園児のような黄色い帽子をかぶっている。

あまり服と帽子のバランスが取れていない気がする。最近ファッ
ションに凝り始めた文化系の中学生のようなバランスだ。

「うう……だ、けどお前も敬語使ってないじゃないか！ それに
胸はまだ未発達なんだよ！ 今後の成長とやらだよ！ 初対面にそ
んな事言うな！ 変態！ 敬意を持って発言しろ！」

「突然攻撃してくる、よく分からない場所に居る、最初から馴れ馴
れしい。この時点で敬語を使う必要は無いだろう。

それに話を聞いてもらえないから跳び蹴りする変態に敬意を持って
接するほうが無理だろう。それとも、思考も幼女と同等だから分か
らなかった、とでも言うつもりか？」

まあ、こちらにも責はあるからな。これぐらいにしておこう。

「……で、何の用だ。できればこの状況を説明し、自己紹介もして
くれるとありがたい」

「はあ、疲れる、この人。もう嫌だ。帰りたい」

訂正。この餓鬼が一番悪い。とりあえず被っている帽子を取り上げる。

サラサラの長い金髪がふわっと舞い上がる。白いローブで金髪とはまあ、どこの国から来たのだろうか。

「え、ちょ、返せ」

涙目になってる気がするが、気にしない。もっと重要なものが目の前にある。

幼女の黒髪の周りには、かの有名な磔の救世主^{メシア}、キリストの茨の冠がついていた。

> i 3 0 3 2 2 — 3 8 9 2 <

「えと……コスプレ趣味か？」

「本物だ！ だから帽子返せ！」

とりあえず返してやると、やっと説明を始めた。

「私は神で、ここは私の世界。あなたには、『夢』と『アリス』をどうにかしてもらったために来てもらったの。」

……精神病院は近所にあっただろうか。いや、むしろその前にこの幻覚は解けるのだろうか。

第1幕 空白世界と幼き子（後書き）

こんにちは、勢いで更新してしまうcameです。

正直な話、受験が近づく身で執筆って辛いんだな、と二話目にして痛感しております。

・・・止める気は無いです。

ただ、書ける時間少なすぎます。睡眠欲と勝負しながらの執筆は大変ですが、剣よりも強い最終兵器、「ペン」を駆使して戦っています。

・・・実際打つのキーボードですね。意味無し・・・orz

どうかこんな駄文書きの学生に付き合ってあげてください。

3・15 内容一部修正

6・26 表記、内容修正

9・03 挿絵

友神の恋乃様に書いていただきました！感謝です！

第2幕 焦燥と依頼と少しの好奇心

さて、現状を見てみよう。

今居る場所・・・真つ白な世界（しか見えない）

自称神曰く「私の世界」

今一緒に居る人物・・・幼女。白いローブと黄色の帽子を着用。

本人曰く「神」で、キリストの茨の冠をつけている。

幼稚園児がやるにしてはゴルゴダの丘の台詞は過激だろ。

宗教関係の幼稚園か？何でこんな仮装をさせ「本物だ！」……思考を読んだ、か。

はあ。死んでもいないのに神に遭う破目になるとは。

「で、「夢」とかあります？とか何なんだ？新出単語が多すぎて小2で科学論文読んだ時みたいなんだが。」

とりあえず、「神」というのはなんとなく理解した。正直納得はしていないが、人間はまだ神が存在するかどうかという議論に終わりを見出していない。ならば存在してもおかしくはない。そうでなければ、例えばこの世界が幻覚だとしたら、知らない人物が出てくるのはありえない。少なくとも自分の頭の中にある情報のみを使うはずだ。

であれば、「私の世界」というのも不可能なことではない。神なら世界を作ることなど容易いのだろう。まあ実際、何も無い空白のような世界だ。どこまで行っても何もなさそうだからな。なら、神でも簡単に作れる世界なのだろう。次に、夢、ありすの二つの単語

ありますが人名だとすればそれはどこかの物語の主人公に被る。あの話は確か木の中に落ちて、トランプの女王をどうにかこうにかして、最後は夢オチだった気がする。いや、しかしそれでは「どうにかする」という単語はつかないはず。どこぞのゾンビ映画のクロールン達だろうか。いや、あれは主人公が全員救っていたはず。それに、「夢」という単語とは繋がらない。まず作品で考えるのがまずかったのか？であればもうこれ以上考えても出てこないだろう。複数の「ありす」という単語が関わる夢など見たこと無い。

「……いやいやいや、小2が科学論文でそこまで考察できるの!？」
「自分はこれが普通だったが、何か問題でもあるのか？」
「いや、その、別にいいよ……はあ……」

あさつての方向を向いてため息をつく幼女。中身はもつと老けているな。

「幸せが逃げるぞ？」
「幸せが逃げるからため息をつくんだよ」
「幸せを与える側の者が何を言うか」
「もういいよめんどくさい! ……コホン。では、説明しよう」
「手短に頼む」
「善処はするよ。」

さて、まずはこの事態が起きた原因から説明しようか。
さつきも言った『夢』っていうのは、人間でいうところの、いつてもそのままなんだけど、夢、つまり願望とか目標とかそういうものを司っている、神に近い存在なの。

『夢』は私や君みたいに自我があって、個性とか感情もあるの。
『夢』はたくさんいて、それぞれ担当のジャンルの夢を持っている人間に憑く。

で、憑かれた人間は潜在していた自分の夢に気付いて、その夢を

かなえようとする。ここで所謂目標が出来たり、急にやる気が出るようになったりするわけなんだ。

夢が叶えば、『夢』にとつての栄養が与えられ、それによって『夢』が成長するの」

「まるで寄生虫だな。」

「まあ、そうかもしれないけど、夢に目覚めるのは『夢』が憑いたからなんだし、共生状態って言うてほしいな？（夢に目覚めるって矛盾かな？）」

「共生というより、強制だろう。その夢自体自分のものかどうか。おお、怖い怖い」

「……手厳しいね。でもデメリットだってちゃんとあるの。」

もし夢が叶わなかったら『夢』の精神はかなりのダメージを受ける。まさに瀕死の重傷、生死の境というくらい。死という概念が夢にあるかどうかは聞いたことがないけどね。三途の川は見えるのかな？

つと、話がずれたね。で、1つ、たくさんの人が抱いて、しかも叶わない夢があった。

その夢が何だったかは分からない。でも、とても多くの人が抱いた夢だった。

その人数だけ死にかけた1つの「夢」は気が狂ってしまったの。多くの人が抱いたわけだから持つ力も強くて、それはとんでもないことをしようとしたの。

どんなことだと思う？」

「んー、夢、か。忘れなければいいわけだから、洗脳とかか？」

「おいしい、のかな？まあ、忘れさせないっていうのはあってる。

新しい世界を作って、その世界の神になる。そんな事をしたの」

「……予想の斜め上を行ってくれるな」

「まあ、ふつうは思いつかないよね。」

でも、狂ってた「夢」には関係ない。マッドサイエンティストとかと同じ感じかな？

で、自分の世界を作ったはいいものの、自分の作りだしたものでないわけだし、得ることのできるものも少ないし、結局叶わないことだって多い。自分の体を食べて栄養にしてるわけだからね。

だったらどうするか。

今度は力を与えて必ず叶えることができるようにした。それが『アリス』」

「狂ってるのレベルが人とは違うな、おぞましい」

「まあ、仕方ないよ。数え切れない回数死にかけ？まあ、死にかけてるわけだし。」

で、まだ自分の世界作って引きこもるだけならよかったけど、その世界に人を連れ込んでさらに自分の狂気付きの力を押しつけてるわけだから、神としても黙ってられないということになったの。

その結果君に『アリス』を救出して『夢』をどうにかしてもらったことになったの」

「なるほど。そのままだとその『アリス』はどうなるんだ？」

「狂気にあてられて死ぬか、狂ってて何をするかわからない『夢』に殺されるか、どちらかだね」

「死ぬしかないじゃないか！……やれやれ、面倒なことになった」

「さらに、『夢』が作った世界が少しずつこの世界を侵食してて、放置すると今から30年以内に地球が魔獣とか出る人外魔境と化するよ」

……これは人類の危機だな。かなりピンチ。

「で、何をすればいい？」

「お、話が早くて助かるよ。まず君には「夢」の作り出した世界、それも「1番目アリス」が呼び込まれる前の世界に行ってもらおう。そこで死ぬ「アリス」達を救ってもらおう」

「長話は嫌いだからな。別に正義の味方気取りというわけでもないが。で、報酬的なものは？」

「世界の平和」

「……………」

「いや、冗談だよ、悪かったって、ホントはあるから。」

「神力が使えるようになること、あと帰ってこれたら一つだけ要求を叶えてあげよう」

「・・・神力？」

「神の力。思考を読んだり、海を割ったり、石をパンに変えたり。いろいろ出来る楽しい力。それが無条件で使えるのさ。どう、いい条件でしょ？」

「神の力が……人外だな、まさに。気になるが、少しばかり気後れする。」

「他に報酬の例は？」

「神力は強制だよ。向こうに送る際に私の力を少し持たせないと「夢」の張った結界が強すぎて入れない」

「それは報酬というのか？」

「うゝ、仕方ないでしょ！？　そのために私の力の大半は無くなるんだから！」

「…………それはどういうことだ？」

「夢の張った結界が強すぎるのと、あと神は直接世界に干渉できないというのもあって、君を向こうに送るために力の大半は使い切らなくちゃいけないの」

「……………すまない。悪いことを聞いた。（勢いで謝ったが……………頼まれている側なわけであって謝る必要はない、はずなんだが……………）」

「いや、別にいいんだけどね。まあ、そういうわけだから、報酬は変えられない」

「いいように操られた気がする……まあいいか。」

「分かった。ところで、『アリスは何らかの能力を持って『夢』の作り出した世界で生活することになる』と言っていたが、自分の能力はどうなるんだ？」

「向こうに行かないと分からない」

「いい能力であって欲しいものだ。文字や言葉、通貨はどうなっている？」

「日本そのまま、のはず……でも、物価が現実と比べてありえないくらい安いから、困ることは無いと思うよ。それに、送る時にお金はサービスで少し入れておくから、気にしないで大丈夫」

なるほど、ただ、早めに稼げる仕事を見つけよう。作り物とはいえ世界なのだ、仕事くらいあるだろう。

「それじゃあ、そろそろ送るよ」

「了解。ところで、世界の名前は？」

「名前？・・・たしか、『シユタイン』だったはず」

「なるほど、厨二病風の名前だな」

「そこは同感だよ。なんか、微妙な名前」

「まあ、どうせいい名前が思いつかなかったんだろう」

「だね。じゃ、向こうの世界を楽しんで、でもしっかりと『アリス』を救ってきてね」

そして、自分は世界から消えた。

「しっかり頑張ってきてね！ また、会えるといいね……ってえ？
ちょ、GYAAAAAAAAA!!!」

そしてかつて最強の智の神と謳われた少女も、世界から消えた。
二人はゆがんだ「夢」の世界、『シユタイン』へと

第2幕 焦燥と依頼と少しの好奇心（後書き）

あとがきを三回書き直す羽目になったcameです。
マニユアルって現在のウィンドウで開くんですね、かなりショックです。

『シュタイン』を二人が散々馬鹿にしましたが、A i nのシャープ替芯から取ってます。強化シリカで作られた世界・・・というわけではないです。

次こそは主人公の名前を出したいです。

3・15 内容一部変更

6・26 表記、内容修正

第3幕 新たな世界

真っ白な世界。

さっきまでいた世界よりも、さらに白く、そして暗い。

熱い。苦しい。辛い。

精神が肉体を攻撃し、理性が本能を侮蔑する。

狂喜と絶望が入り乱れ、安らぎと憎悪がせめぎあう。

“死”と“生”が語り合い、騙し合い、

そして再び生を受け入れる

「知らない天井だ……いや、定番だが、本当に知らないな」

さて、幼女神曰く、ここは「夢」が作った世界だったはず。
ならば何故、自分は木の天井が見えているのだろうか。
何故ならばそれは建物の中だからである。

……すばらしく洗練された完璧な無駄である自問自答という名の
現実逃避が終わったところで状況確認。

まず、今居る場所はログハウスである。

そして、ここは私の家、ということになっているのだろう。
何故なら外に、自分の名前の表札がかかっていたからである。
自分の名前だ、間違えるわけが無い。

とりあえず表札は剥がしたあと粉碎しておいた。方法は後述。
そして、外。

木、木、木、木、木。

家の前にある広場以外一面の森。
体に良さそうだ。

緑が体にいいのはマイナスイオンだったか？思い出せん。ボケたかな。

そして、家の中。

こじんまりとしたログハウス・・・なはずだった。

外と中でサイズが合わん。外観は2階建て程度なんだが、普通に6階ぐらいまである。

本、本、本、本、本。、外の木全部と同じくらい繊維使ってるんじゃないかと思うくらいの本。

まさに大図書館。はるか上まで棚がある。

政治、言語、娯楽と、さまざまなものが並んでいる。

特に魔法関連はすさまじく、一冊開いてみたところ、

……汝が力、見定めたり。その力、汝が善のために用いられよ……

：

「……本が……しゃべ、った……え、え、ちよつとまで、落ち着け、どんな仕掛けだ、電子オルゴールか？！ 電子オルゴールなんだな？！」

魔法だ

「そうですか、魔法ですか。……意思疎通できるのか……怖いな、とても」

という会話があった。それからずっと視界にビー玉のようなものが見える。

そのしゃべる魔術書に書いてあったことと聞いたことを噛み砕いて説明しようと思ったが固すぎたのでハンマーで叩いて割ったあとにまとめてミキサーにかけると、どうやらあのビー玉は魔法を生み出す元である？精霊？で、魔力でそれを集め、呪文によって精霊の

量を調整して目的に合わせるらしい。

つまり、目の前にあるビー玉を集めれば魔法になるわけだ。

割と簡単だな。魔力をどう出すのかとか分かんが。

あと書いてある魔法？ 魔術？ が鬼畜。初歩を覚える前に切り札を覚えた、というか押し込まれた。主に頭に。

他の本も色々すごいものがありそうだし、とりあえずこっちの世界の知識をつけるのに役立つだろう。

そして、このふわふわ浮いているビー玉が一か所にへばりついて
いるのを発見。

手で払ってみると、光った後に階段が出てきた。そんな簡単でいいのか、解呪。解呪じゃない？ そう、ありがとう、魔術書さん。
ゼル○の伝説か、と突っ込みたかったが諦めて降りてみる。

そこには実験用の機材や工具が並んでいた。

昔よく使った旋盤や溶接機、エアコンプレッサーが並んでいる
のを見て、少し懐かしくなる。

これはかなり嬉しい。

本の題名に魔獣という単語が見えたとし、解剖や改造の実験に使える
だろう。

そして自分の状態。

何故か作務衣と忍の装束を足して2で割ったような服装。

ここに来る前も作務衣を着ていたからあまり違和感はないんだが、
これ、カッコいいと思ってしまった自分は厨二病なのだろうか。

……きつと世界が悪いんだ。そうに違いない。

次に、能力的なものがある。しかも確実に人じゃない。

能力ってどう確認するんだろうって思ったら、

「ポン」

という小学生の見るアニメの魔法にありがちな愉快的音と共にカード的なものが出現。

やはりアリスなのだからトランプの兵隊を意識しているのだろうか。

裏は黒と緑のチェック柄で、所々に赤や青、黄色、茶色など、さまざまな色が見えた。

で、能力を見る。

カードの情報

名前：天鐘 アマガネ 風斗 フウト

契約名：？双刀の死神？
ツイングリムリバー

ステータス：

筋力：A

頑丈：B -

器用：B +

知力：A -

精神：A +

俊敏：A +

特殊技能：

・神力

世界神の力を操る能力

・異端分子
イレギュラー

『夢』の狂気に干渉されず、『夢』の狂気を抜く能力

……感想。チート。いや、人間災害。

ステータスの情報は家にあった「基本戦闘術のその基本」- 相手の力量を見定める- という本に書いてあった。その本曰く、

？能力を示す‘カード’において、アルファベットで基準が示されている。これは、Eが平均であり、Dは訓練兵レベル、Cは達人英雄と呼ばれるレベル、Bは龍などと1人で余裕で戦える怪物のレベルを意味し、Aは英雄が強化魔法をかけた状態でしか見ることが出来ない「神」の域である。何もせずにAの状態を得られる人間はまずいないだろう。？

とのことだった。

神になつた記憶は無い。

まだ人をやめた覚えは無い。

ジョースター家の血を狙うわけじゃないし、時間をとめたりナイフ投げたりしてない。

……神力か？ 神力の影響か？ 石をパンに変えるなら体を化け物に変えるなど余裕ですと？ 小さな親切大きなお世話、かなりシヨックなんだが。

まあ、終われば何とかなるだろう。

終わる？ 終わったら帰れるのだろうか？

まあ、報酬に「帰ってきたら」があつたから方法はあるのだろう。

……これ以上は止めておこう。鬱になる。

……あ、契約名って何だろう。随分と厨二病な名前だが、意味はあるのか？

横にはタロットカード的な絵が描かれている。

何というか、‘二刀流の死神’としか言いようが無い。

敢えて喻えたとすれば、遊戯王の「深淵の暗殺者」のようなイメージだろうか。

ソルキヤ バーの多喜が忍装束をしつかりと着たような、そうでないような……

そしてあることに気付き、自分の格好を見る。

「同じじゃないか……」

完全に同じ。

二本の刀とナイフの中間的なものも腰に下がってるし。
もう、完全に厨二病だね。

……認めん。絶対認めん。

第3幕 新たな世界（後書き）

こんにちは、体調崩して登校率50%になっていたcameです。

カードや契約名など、色々とnew wordsが出現。

主人公の名前も少しだけ出ました。

しっかりした名乗りは2話ほどお待ちください。

今回は主人公が勉強と実力テストを頑張っていきます。

新しい世界の歴史や文化について、魔法や武器、神力についてを勉強します。あくまで予定です。

ちなみに昨日は友人の誕生日でした。誕生日祝いをあげてなかった・

・
応援してくれた友達にも、この場を借りて、「ありがとう!!」

2・22 表示形式修正

3・15 内容変更

6・26 表記、内容変更

第4幕 超人か、人ならざるものか

カードのことについても少し詳しく調べてみた。
裏の模様は属性を示していて、

白	赤	青	緑	茶	黒
光	火	水	風	土	闇

らしく、自分はどうやら闇と風の2属性らしい。闇の旋風ですか、BFですか、そうですか。

契約名って言うのは、王族から与えられたり、英雄になったりした時に決まる、二つ名のようなもので、これの知名度によってその人物がどの程度有名かが分かるらしい。

英雄になった記憶はないのだから？神補正か？

まあ、王族から与えられるって形でギルド（依頼受けて討伐や採取を行うところだろう）から能力の高いものに与えられるらしいから、ごまかしに困ることはないだろう。

特殊技能っていうのは一部の人が使える特技のようなもので、人それぞれに決まっているが持っている人が非常に少ない。

異端分子の能力は、まあ、目的のために必要だし、あって当たり前だろう。

一通り現状の確認が終わったので外に行って実力測定。
何冊かの本を脇に抱えて家の外に出る。

持ったのは、「基本魔法 - 魔獣から生活を守る術 - 」と「1人でできる戦闘訓練 今日から君も冒険家!」、あとは使えそうなものを少々。
タイトルがアットホームでファンタジックなのは気にしてはいけない。

さて、まずは基本魔法から。

詠唱は本をそのまま読み上げる。覚えるのは嫌だ。これ以上邪気眼や魔の腕に染まりたくはない。引き返せなくなりそうで怖い。

母なる大地の守り手よ

我が進歩の糧となれ

「土くれの案山子」

地面が盛り上がり、300本ほどの柱が地面から生えてくる。

今使ったのは？土くれの案山子？という、土製の的を本来は少量生産して軍の演習や練習に使うものらしい。

使い手の意思によって変化し、熟練すれば動いて戦闘をするようにすることも可能なため、囷や威嚇にも使えるらしい。

詠唱の時に気付いたが、唱えている時は指先から半透明の糸が出て、ビー玉精霊の中を通って形を作っていた。それが地面の中に入って、柱が生えた。

つまり、この糸、恐らく魔力を自由に操れば、無詠唱での発動など容易なのではないか。

喋る魔道書で確認。

「おい、魔道書さん? …… (反応するんだろうか?)」

我に用か? 異界の者よ

「意思疎通できるのか……異界の者? 確かにその通りだが……まあいい。質問があるんだが、魔法って無詠唱で発動できるのか?」

我が主に与えた力を使えば出来るであろうが、一般的にはかなり

の回数無詠唱で発現させたい魔法を使わねば出来ない。イメージが固まらぬ。

「なるほど・・・ありがとう、参考になった。」

気にすることは無い。我はただの魔道書。魔術の為の踏み台ではないのだからな

さて、本との意思疎通ができたのには驚いた、しかも口調が最初より柔らかいものになっているのにも驚いたが、まあ、異世界だ。なんでもありなのだろう。

自分の能力やら格好やら契約名やらが厨二病なのも異世界だからなのだろう。そう思いたい。

さてと、無詠唱での起動テストだ。現在の心境としては試作品のレールガンのスパークギャップに手をかけている瞬間、といったところか。

ふむ、この世界でEMLを作ってみるのもありかも知れない。強力な戦力だ。

っと、思考が外れた。魔力の系を出すのには少し時間がかかったが、意識を集中させればどこからでも出せるようだ。思わず九尾の狐とか遊んだ私を責める者はいないだろう。

とりあえず指先から魔力の系を出して、茶色のビー玉精霊を通す。3個ほど重ねたところで地面に落とす。

地面が震え、ひび割れ、巨大な水晶が飛び出してきた。

……あれ？無詠唱でもできるんじゃないのか？

「おい、魔道書さん。無詠唱で？土くれの案山子？使おうとしたら財宝ゲットしちゃったんだが……」

魔力の系に発動したい呪文のイメージを練りこまねば、魔法は発動せぬぞ？

「なるほど、イメージか。……え？じゃあ、水晶が出たのは何故？」
主の魔力に反応して土の中で水晶が生成されたのだろう。つまり

力技だ

「力技って……人外だな、ほんとに」

まあ、弱く出せば威嚇に使えるから、便利なものだ

「その発想は無かった。まあいいや。ありがとう」

構わぬ。しかしその魔力量と素質、一度主人に会わせた方がいいのだろうか……

「主人？何のことだ？」

む、聞こえておったか。戯言だ、忘れてくれ

「……気になるが、まあ、仕方ない。話す気になったら話してくれ」
承知した

さて、またしても謎が増えたが、ひとつ問題が解決したんだ、良ししよう。

いや、水晶の処分法の問題があるから、±0か？

思考放棄してもう一回挑戦。

さっき見た案山子をイメージしながら魔力を出す。

……あっさりと完成した。ストーンヘンジの群生地か、ここは。

自分で言っておいて意味が分からんぞ。

なんか、ここで失敗すれば人間らしいと思えたんだがな……

さて、次に身体能力テスト。

2本の小刀を両手に構え、走る、走る、走る。

その勢いのまま土柱に斬りつける。

背後で崩れる音が聞こえるが振り返らず、一気に飛びあがり、踵を叩きつける。

重力に従って落ちた踵は少々硬めの土の塊を砕き散らす。

反動を利用してもう一度少し低めに飛び上り、空中で回し蹴りを放つ。

回された脚は巨大な丸鋸のように周囲の土柱を同じ高さで穿つ。

回転の勢いを利用して一気に突っ込み、両手で同時に2つの土柱を斬る。

まるで鮮血のように土が舞い散り、ごとりと音を立てて地面へと落ち、碎ける。

最後に両手を交差させ、目の前の土柱の人でいえば首に当たる部分を手を開いて飛ばす。

飛ばされた首は3歩ほど先に落ち、土に還った。

ここまで約10秒。

あえて一言、コメントをここに残そう。

「化け物が!？」

勿論、反応してくれるものは何もいなかった。

第4幕 超人か、人ならざるものか（後書き）

かなり遅刻をしてしまいました。しかもこのクオリティは・・・ちよつとどころじやなく問題アリです。ごめんなさい。

定期テストという拷問によって平等に与えられていたはずの時間はいつの間にか迷子になっていました。

いま、テスト2日前です。私は何やってるんでしょうか・・・

次回は早めに投稿します。テストが終われば時間は帰ってきてくれるはず・・・

ん？メール着信。

「テスト近いから勉強教えろ by 年下の友人（ため口）」

・・・一昨年習った内容なんか覚えてないよ。

まあ、次回も頑張っていきますので、読んでくれるとうれしいです。
cameでした！

2・22 誤字修正

3・15 内容追加

6・26 表記、内容修正

幕間劇 第1節 あらゆる過去は思い出となりて その1（前書き）

ごめんなさい！体調が悪くて昨日と一昨日はダウンしていました。
しかも今回は本編が進みません。ご了承ください。

幕間劇 第1節 あらゆる過去は思い出となりて その1

「ただいま帰りました」

そう言いながら玄関で靴を脱ぎ、家に上がった。

彼は天鐘風斗。中学3年生である。

「おう、帰ったか。どうだったよ？今日の学校は」

首にかけてタオルで汗を拭きながら奥から出てくる男が出迎えた。

彼は天鐘英治。風斗の父である。

彼は小さな町工場を運営していた。

「まずまず、といったところかな。教師は理想の高い人が多いが、生徒の雰囲気あまり良くない。この間行った高校の方が性に合う気がする」

「この間のつていうと、隆文の？」

「そう。落ち着いた雰囲気、全体の向上心も高く、何より成績が上位ならば理科室などの研究設備が自由に使えるというのがおいしい」

「ほう、嬉しいこと言ってくれるじゃん？」

「！……長谷川さん、いらっしゃっていたんですか」

「まあね、暇なんだから」

「書類をやりなさいよ、しょ・る・いを」

「あ、英治酷い！せっかく遊びに来たのに！」

そう言って笑う男は長谷川隆文。‘長谷川高等学院’の校長である。

英治の小学校時代からの悪友で、暇があれば工場に来て英治と謎

の工作をしている。

「にしてもさゝふう坊がうちの高校に来るなら普通にトップとれるんじゃないの？なんなら試験問題渡してもいいしさ？」

「汚職ですよ？それ」

「いいのいいの、校長だし、代々うちの家系がやってる私立なわけだし？全権俺にあるし？」

「職権乱用です」

「汚職とか職権乱用とか以前にふつうに駄目だろ」

「うわー英治とふう坊の二人で俺の事いじめる」

「うるさい、黙れ（つてください）」

「同時に言うこたあないでしょ！？」

「ほらほら、喧嘩しないの」

エプロンのまま出てきたのが風斗の母、千恵である。

一見かなり若く見えるが、もう四十代である。

「ただいま帰りました。」

「お帰り、風斗。高校、どうだった？ 母さんは前のところの方があつてと思うけど、どう？」

「今日行つたところは微妙。あまり生徒から意欲を感じられないね」

「ふう坊にかかると名門校もボロボロだな、さすがは英治の息子だ」

「まあ、俺の血を引いてるんだ、そのくらいは当たり前さ」

そう言つて胸を張る英治。実は若いころ県内トップクラスの成績だったりする。

普段は勉強をしなかったのではほとんど点数はとれないのだが。

「まあ、はやく荷物を置いて着替えていらつしやい？ちようど心太が冷やしてあるから、みんなで食べましょ？」

そういつて微笑む千恵。

中学3年の、夏だった。

幕間劇 第1節 あらゆる過去は思い出となりて その1（後書き）

こんにちは、c a m eです。

今回は風斗の過去です。次回は高校入学までになります。

にしても、主人公の家族は書きづらいです。登場シーンがかなり減るかもです。

今回から表示形式を変更しました。見づらかった場合すぐ直しますのでご連絡下さい。

では、続きでお会いしましょう。

追記：修正したら1000字に満たないとはどういことですか……

6・26 表記、内容修正

幕間劇 第2節 あらゆる過去は思い出となりて その2

「校長と友達でさ……」

「裏口入学で……」

ひそひそと陰口を言う声が聞こえる。

風斗の成績に対する陰口だ。

どうせ2位を取って入ってきたことに対する僻みなどだろう。

（長谷川さんの学校に結局入学することにしたのだが、割とうるさい。大体、裏口入学だったら2位なんかとらんだろうよ常識的に考えて）

まあ、普段の成績を見れば裏口入学などと言ってられないだろう。

にしても、どこから順位など掴んできたのだろうか……。

風斗は気にせず帰る支度を始めた。

「ハロー、噂のナンバー2。もうお帰り？」

「風斗君、帰り1人？一緒に帰らない？」

帰ろうとすると、女子が二人声を掛けてきた。

元気のいい、というか落ち着きの無い方が浪本 絵里。

おしとやかな方が乃木 春海。

二人とも入学翌日から話しかけてくる、珍しい人たちだ。
断る必要もない、そう風斗は判断した。

「別に構わないが……」

「よし、決定。レッツゴー！」

「まったく絵里は……じゃ、行きましょうか」

「春海はいつまでもかしこまってないでさあ、もう少しフレンドリ
ーに、ね？」

「ね？ じゃないよ……」

「あ、冬彦発見！ 拾ってくよ」

「……相変わらず傍若無人な元気さだな」

「ふふ、そうですね。まあ、あの元気さで周りが付かれるせいで余
計疲れるのですけどね」

窓の外は鮮やかな夕日が沈み始め、鴉と鳩に交じって鷹が1羽飛
んでいた。珍しいこともあるものだ、と風斗は少し感動する。

浪本が走っていった廊下に掲示物を興味深そうに眺める青年がい
た。

彼は稲本 冬彦。無口・無表情・無感情の三拍子が揃っていると
いわれている、所謂クールビューティーである。男だが。彼の前で
女のようなと言われると無表情で本気で殴られる。

とてつもなく無表情なので、普通の人が見ると分からないかもし
れないが、良く観察すると感情があるのが分かる。今はどこことなく
楽しそうに見える、気がする。

「冬彦、帰るよ」

「何か、興味深いものがあつたんですか？」

「このポスターに書かれている戦争の悲しさについての本を書いた
人は半年前に戦闘機の優秀さについての記事を雑誌で2ページ半書
いている。主張の矛盾」

「えっと、それは……確かに矛盾ですね」

そんな他愛もない話をしながら、外に出る4人。

だが、この3人は風斗と普通に会話をしているが、他の人間も同じかというところではない。

校門を出ると、路地から乱れた服装をした生徒が6、7人ほど出てきた。

恐らく待ち伏せてでもいたのだろう、さりげなく囲まれる。

「おい、手前が天鐘だな？　ちよつと面貸せや」

「何故？　何か用があるならここで済ませてもらえるとありがたいんだが」

「うっせーな、さつさと来いよ」

「必要が無い。それに、お前たちと話しても何の価値もない」

「あゝ？　価値が無い？　意味わかんないんだけど。めんどくせーなこいつ」

「面倒なのはこっちだ。用が無いなら帰らせてもらおう」

帰ろうとした肩を乱暴につかむ男子生徒。

「な・に・が『価値が無い』だオラァ！」

おそらく半分は本気で殴りかかった拳は

「何勝手に話進めてんの？　人の友達に手出さないでくれない？　というか放置？　放置なの？　これだから馬鹿は……」

瞬間的に前に出た浪本によって片手で止められていた。

「な……ッ！」

「すまん、浪本。手を煩わせたな。まったく、言葉だけならそのままにしてやろうと思ったんだがな……フッ！」

風斗の蹴りが腹に入り、後ろに吹っ飛ぶ男子生徒。

「お、やるじゃん」

「まあ、これくらいやっておいた方が嘗められなくていいからな。嘗められるというのは非常に面倒だ。この手の人間は自分より下だと判断したものに悪質な嫌がらせをする傾向が強い」

周りの取り巻きはざわつきだす。

「てめえふざけてんじゃねえぞ！」

「調子のとってと殺るぞコラア！」

風を斬る音が聞こえる。空の獣が獲物を見つけて急降下する時のような、そんな音が。

大きな鷹が男子生徒達に襲いかかった。

「いつまでも調子に乗っているのはあなたたちではないですか？」

乃木の周囲には鷹、鴉、鳩、鳶など、多くの鳥が集まっている。

一般的な貴族の行う？鷹狩？は、鷹だけを使うものではない。

彼女は、身近な鳥を鷹狩用に訓練し、周囲に常に飛ばしているのである。

ただ獲物が獣から人間に代わっただけなのだ。

奥では何かが叩きつける音が聞こえる。

男子生徒の一人がはるか後方に飛んでいき、そこには地面と垂直に掌を前に突き出した稲本がいた。

「？気？は空想上のものではない。れっきとした武術」

誰に説明しているのかは分からないが、本人曰く？気？を使つて人を紙のように吹き飛ばしているようだ。

……人を吹き飛ばす遠距離の武術とかそれ武術じゃない、絶対武術じゃない、と、周りは心の中で呟いた。

「さて、と。私の友達に手を出した罪は重いわよ？」

「それに、言葉の暴力は私たちにまで向いていましたからね。しっかり代償を払ってもらわないと」

「身の程知らず。制裁」

「みんなにまで迷惑がかかってしまった……。とりあえず、4人分のダメージを体と心の両方に刻み込む必要があるな」

「お、お前ら何なんだよ！？」

「何と言われてもな……。ここは、トップ・オブ・カルテットと洒落てみようか。」

「それは無いよ……。ちょっとダサいかな？」

「……ネーミングセンスのなさは自覚しているさ」

トップ・オブ・カルテット。彼らはまさに？最強？だった。そして彼らが後に、二つの世界に大きく関わることとなる

幕間劇 第2節 あらゆる過去は思い出となりて その2（後書き）

二話連続投稿って気持ちのいいものですね、c a m eです。

風斗の友達の話と天才に見える秀才はつらいというお話です。彼らの登場シーンはきっと多いですよ。幕間劇での話ですが。

次回は本編が進み、やっと人が増える・・・かも？

それでは、次回でお会いしましょう。

追記：不良の口調なんかわかりません……誰か教えてください

2・24 題、改行の修正

6・26 表記、内容修正

第5幕 決意、すなわち心の武器

自分が化け物並みの身体能力を発揮してしまったことに対して茫然と体内時計で4時間ぐらい立っただけでいた。

その？茫然？は徐々に、より暗く、深い？絶望？へと飲み込まれていった。

何故あつさりところへ来たのか。

何故今ここにいるのか。

ここはどこなのか。

自分は帰れるのか。

帰ったとして、帰った先で自分はどのようなのか。
帰れなかったとしたら、自分はどうするのか。

コワソウヨ。スベテヲコワセバイイ。ソレガイチバンラクナンド
カラ

声が聞こえる。

誰の声でもなくて、誰の声でもある。

それは‘世界’であり、この世界を作った「夢」でもある。

誰に説明されたわけでもなく、自然と理解する。

壊す。とても魅力的な言葉。

何故救う必要がある？ただ頼まれただけなのに。

世界などどうでもいいではないか。

自分が日常に戻れないのならこの世界のすべての日常も公平に壊すべきだ。

思考の螺旋階段はるか下へと堕ちてゆく。

暗い、狭い心の底。

そこにいるのは、？狂気？。

サア、スベテヲコワソウヨ。

「こ、わす……………っ」

だが、どこかで声がする。

ほんの小さな、でもしつかりと存在する光。

暗い世界は少しずつ姿を変えてゆく。

壊してはいけない。

何故？そんなこと分かりきっている。

頼まれたから。それ以外にはない。

頼んできたのはたった一人の少女だった。

彼女は？神？。人とは遠い存在。

それが素直に頼んできた。

それを断る必要が、いや、価値がどこにある？

あえて理由を付けるなら、これを正式に依頼とする。

期限はなし。報酬はこの力。

あの神に頼まれた、依頼された仕事。

だから、壊すことはできない。依頼を破棄することはできない。

「……………ふう。危ない危ない。」

危つく感情に飲み込まれるところだった。いや、この場合世界に飲み込まれかけたのか？

咄嗟に理論武装しなければ今頃狂っていたな。

まあ、自分の知らない存在が自分の空間に入ってきたら除去しようとするだろうな。それが普通だ。

しかし、今は自分自身の心そのものかもしれない。

だとしたらどうするのか。

真っ向から立ち向かって、粉碎する。これが自分の得た答え。

世界が邪魔するなら世界を敵とみなす。ただそれだけ。

学生をやっていたころは世界と戦うなんて思いもしなかったな。

まあ、今回はもともと敵は世界そのものだったんだ。そんなこと、今さらすぎる。

きつと、この感情は‘恐怖’だったんだろう。

自分に、世界に、神に、今に対する恐怖。

そして‘狂気’に逃げようとした。

しかし、もう気にしない。依頼なのだから。

だから、このことは考えない。今は別に、やることがある。

救うなら、戦うなら、力を使う。

全てを救い、絶望にたたき落とし、破壊し、守るための力を。

なら、自分の力を完全に把握しなくてはならない。

よし、冷静な判断もできるようになってきたな。

しばらく悪役には黙っていてもらおう。

いつか、完全に黙らせる時の為に。

「さて、と。次は攻撃魔法、かな。」

自然と言葉が紡がれる。

怒りよ、悲しみよ、恐れよ。汝らは我がものである。汝らの力は我がものである。

怒りは斬り裂く刃に、悲しみは凍てつく吹雪に、恐れは貫く力に。破壊の為に作られた三つは今救うための剣となる

「畏怖と決意の宝剣」

地面を割り、突き出てきた一本の剣。

その剣は、とても輝いて見えた。

第5幕 決意、すなわち心の武器（後書き）

ごめんなさい、ようやく復活のc a m eです。

どうか言い訳をさせてください。3年生の卒業のために毎日働かされてました。

あと、体調崩したり塾の時間のシフトが変わったり友達に頼まれて新作の構想がまとまらなかったりで気付いたらこんなに時間が・

・
本当にごめんなさい。

3月が終わったら少し更新スピードが上がる可能性もあるので、そこまで我慢してください。お願いします。

追記：やっぱりこれも短いですね……嗚呼、文才が欲しい

6・26 表記、内容修正

第6幕 神の力

攻撃魔法撃とうと思って創作してみたら本当の意味で創作してしまった。

「魔道書君、少しいいかい？」

何か問題でも起きたのか？

「攻撃魔法を撃とうと思ったら氷の剣が出来てしまったんだけど、これは使えるものなのか？」

その剣のところまで持って行ってくれ

本と対話しながら地面に刺さった剣に向かって歩くというとても力オスな状況を演出し、剣のところに到着。

これは……名剣、いや、魔剣、もしくは聖剣と言っても過言ではない代物だ

「え……そこまですごいものなのか？」

魔法というのは感情に大きく左右される。最大級の魔法でも恐怖心に囚われていては中級魔法程度にしかならぬ。この様子だと、かなりの決意と覚悟を持ってこの剣を作ったようだな

「なるほど、感情が重要ということか。確かに、ちょっと本気で世界救おうかな、と思っていた」

世界を救う、か。まあ、主ならできそうなことだな

「そうか？そう言ってくれると嬉しいぞ」

思わず照れる。少し前まで照れることなどめったになかったんだが……っは、これも神力の影響か？！心が素直になるとか、そういうことかっ！

だが、主は感情表現や対話の能力を高めるべきだ。いつまでも話し相手が本1冊では厳しいものがあるう？

「う……なかなか痛い所を……。だが、まだこっちに来てそんなに時間がたったわけでもないし、気にしなくてもいいのではないか？」
「そうも言っていないであろう？世界を救うのなら話術は重要だ」

「いや、まだ間に合う、はず……？」

「転ばぬ先の杖といつてだな……ッ！ 伏せろ！」

仮初の我が家であるログハウスの横にコロニーレーザー並みの光線が撃ち込まれ、視界が真っ白になった。

瞬間的にしゃがみ込んだおかげでさつき壊した案山子の破片に遮られて大分威力が下がってはいたが、あの光が直接目に来ていたら確実に失明していただろう。

……にしてもあの家、よく壊れなかったな。

「ありがとう、魔道書。助かった」

「構わん。それより、何かあるぞ！」

光が薄れ、そこには、私を送り込んだ張本人、幼女神が立っていた。

……そういえば名前聞き損ねていた。

「お前、何故ここにいるんだ？」

「返事は無い。」

何も見ていない虚ろな目で、何かをずっと呟いている。

「どうして……ねえ……どうして……」

「いったい何が……ッ！来るぞ！」

突然幼女神が襲いかかってきた。
真っ白な光のようなものを手に纏った状態で叩きつけてくる。光の筋の一つ一つから空気の切り裂くような音がする。
視界に入った瞬間には攻撃が当たろうとしている。
咄嗟にかわしたが、刃のようなものが頬をかすった。
途端に頬に激痛が走る。

（くっ……見切れないッ！）

右、左、上、下。異様なスピードで凶器と化した拳が繰り出される。

少しずつ、当たる回数が増えてゆく。

掠るだけとはいえ、確実にダメージは蓄積していく。

「救えないなら……壊せば……創り直せば……」

眩きながら死を振りかざしてくる、その目は狂気で真っ赤に染まっていた。

突然目の前に拳が放たれ、小刀の峰で受ける。

「何故だ、いったい何故ここにいるッ!？」

答えはない。

危つく吹き飛ばされかけるが、空中で上半身を後ろにそらし、空中で一回転して着地し、距離を取る。

だが、なぜここに奴がいる？本当に奴だとすれば攻撃することはできない。もし本人で殺してしまうような事態になったら、少々面倒だ。というか嫌だ。

ここで考えられる方法は、気絶か拘束。出来れば交渉という選択

肢が欲しいところだがそのカードは今手札に無い。

少し考えていただけ、ほんの一瞬の隙だった。

拳に纏わせた光が突然強くなったかと思うと、細い糸が何本もこちらに飛んできた。

左に走ってかわす。が、まるで鞭のようにしなって巻きついてくる。

糸が通ったところには黒い歪みのようなものが出来ていた。

かなり早く避けたつもりだったが、右足が捕まってしまった。焼けるわけでも、腐るわけでも、潰れるわけでも焼けるわけでもなく、当たった部分が消えた。

「ッー!!」

激痛が走る。まだ動くことは可能だが、この状態で立ち回って相手にならないことはもはや確定に近い。

もともと、さっきの身体測定のおかげで自分が人外であることが判明しているというのに、ここまで追い詰められるとなると周りからは残像しか見えていないのではないか。

この人外をこえた人外に対して対策を練っていると、突然神が動きを変えた。

鞭を消し、手に纏った光を消し、自然体で立つ。

達人の自然体というのは、中級者の構えなどより遥かに威圧感がある。この時もこのパターンだ。

一気に周囲の空気が重くなる。さっきまではあちらこちらに浮いていた精霊が見当たらない。

更に、立っている周囲の地面にひびが入り、崩れ始める。その中央で仄かに光る姿は、

「まさに、神、といったところか……っ」

そう、神。破壊神とも、創造神ともとれるその姿は、この世界に生きて間もない自分の命を奪おうとしていた。

そして、更に光が強まり、そこに現れた姿は、

「か、神の次は龍か……本気で殺しにかかってきているということか？　洒落にならん」

全身に神と同じ光を纏い、威風堂々と構える西洋風の龍は見上げるほど大きかった。

その背には、仄かに光が強くなったように感じる神の姿。はるか上にある龍の口から無数の光弾が放たれる。

光であるにもかかわらず、明らかに人が受けたら欠片も残らないであろうそれからは龍や神の周りを覆っているものと同じ力を感じた。

動かしづらい右足を力ずくで働かせ、はるか上まで跳び上る。

一瞬龍と目が合う。

光弾を避け、そのまま龍の眉間に小刀を叩きつける。

一声もあげない龍が一撃を受け戸惑う。後方では光弾で大爆発が起こる音が聞こえる。

この攻撃は賭けだった。龍に感情が無ければ、この程度の攻撃を受けてなんとも思わなければ負け。そう、狙ったのは、

「何を考えて暴れてるんだか、ねッ！」

龍が頭を少し下げた瞬間、龍の額から再び跳び、背中の神を蹴落とす。

一瞬、見た目と構造のレベルが一瞬なのではないかと心配したが、まるで猫のようにしなやかにシユタツと着地している姿を見て杞憂であったと痛みを忘れ苦笑する。

龍が再び上から光弾を降らせてくる。まるで空襲のようなその攻

撃を避け、神に小刀の峰を叩きつける。

片手で受けられ、蹴りが飛んでくるが身長之差で何とか避ける。
一端距離を取り、片方の小刀を投げ、手で弾かれると同時に斬り上げる。

腹部に斜めに傷を入れる。薄い筋から、血が滲む。

やっと与えたまともなダメージ。しかし、一撃が精一杯。

再び光を乗せた拳の一撃が、今度は避けられずにまともに入る。
更に龍の尾による追撃で地面にたたきつけられ、まさに満身創痍。

「ぐっ……かはっ……」

吹き飛ばされた衝撃で投げた小刀も手元に転がっているが、手が上手く命令に従ってくれない。

ゆっくりと、幼女神が歩いて近づいてくる。

落ち着け。考える。死に囚われるな。

まず、いきなりここにきて魔法が使えるとは思えない。

だとすれば、今見事に足を崩壊させてくれた白い糸や手に纏った
白い光、龍の光弾は……。

ふと、ここに来る前のことを思い出す。

「神の力。思考を読んだり、海を割ったり、石をパンに変えたり。
いろいろ出来る楽しい力。それが無条件で使えるのさ。どう、いい
条件でしょ？」

……そう、神力。もし、あれが純粋な力だとしたら。

ゆっくりと震える手を動かし、手元に転がっている最後のチャン
スを手に取る。

手に持つ小刀に力を込めてみる。ここで失敗すれば生存率が0に
限りなく近くなってしまう。

魔法ではない、純粋な力。神の、力。

「全部……ゼンブ……コウス」

神の手が叩きつけられ、そして、

「自分が与えた力で邪魔されるようじゃ、シナリオでは三流以下だぞ」

薄く光る小刀によって止められていた。
そのまま、魔法を使って拘束する。

大地の巨人は全てを集め、
大地の巨人は全てを繋ぎとめる。
「大地の拘束」

神の体が地面にたたきつけられる。
頭を手でそつと触り、

「少し、頭を冷やしたまえよ」
異端分子、発動

第6幕 神の力（後書き）

というわけで久しぶりの幼女神。なんかおかしい・・・違和感が・・・

・
友達曰く

「一番こういうキャラが好き。次いつ出るか詳細プリーズ」

「いきなり幼女とかお前ロリコンだろ、この変態」

「読むのめんどくさい」

など、色々なコメントをしてくれました。最後はスルーの方針で行きますが。

能力を自然と使っちゃってますが次回に説明します。

また、次回の更新とほぼ同時に少し前の話を大幅に修正します。今後にかかわる内容なので見ておいていただくとありがたいです。

では、機会があればまたお会いしましょう。c a m eでした。

6・26 表記、内容修正

第6幕 other side 墮天、崩壊

「GYAAAAAAAAA!!なにこれ!どういう事態!?今北産業!じゃない、説明キボンヌ!」

我ながら意味の分からないことを叫んで堕ちて行く私。最近はずったネットの掲示板の言葉を思わず使ってしまう。何で出てきたのかは知らないよ!

世界と世界の間って落下する感覚なんだ、等と考えつつ、今の状況を判断。

……何をしたかまとめれば分かるかも?

- 1、力の半分を使つて「夢」の世界の結界に隙間をあけた。
- 2、力の3分の1を彼に渡して私の力の影響を下げ、安定して結界を通れるようにした。
- 3、自分のあけた穴に吸い込まれた。

……まさか。

なんとなく予想付いた。

まず、自分の力の半分を使つてこじあけた結界の隙間が、力を一か所に集めて元のサイズに戻ろうとした。

本来ならばもとも力のあつた場所である私に返ってくるはずなんだけど、既に風斗を中に取り込んだせいで方向性が内側に固定。

更に現在私の中に残ってる力が隙間より小さいことで抵抗力が小さくなり、吸収。

このままだと、結界の中に入ってそのまま出れなくなる。

おそらくあのタイプの結界は内側から隙間をあけるのに外側より大きな力が必要。

だとすると……

「積んだ！オワタ！ナンテコッタイ！」

必死になって念話をつなげる。

・・ナ？ い・・こに・・る・・い？

ヘルメス！ ごめん、時間が無いからよく聞いて！ 今から例の異端の世界の調査に行ってくるから、まず、私の管理してた世界の時間経過調整しておいて！

次にゼウスのおっさんのところに行つて、そつちに異端世界から人が出てきたらその人と連絡手段をつくつて、すぐに連絡できるようにして！

・・ナ！ ようやくともに繋がった。何をしてるんだいまったく。とりあえず頼まれたことは実行しておくけど、帰つてこれるかわからないよ？

分かつてる！ ちょっとしたミスで隙間に飲み込まれちゃつて。

味方がいるからたぶん大丈夫

味方つて、人間を巻き込んだのかい！？ ……帰ってきたら、書類のプールで泳げると思うよ

言わないでー！！ あ、旅人の祝福お願いしていい？二人分

はあ……何も考えないで動いたのかい？ 君らしくもない……まあ、今回は発見したのも原因を突き止めたのも君だし、上にはあまりきつく言わないように言っておくよ

ありがとう！ 帰つたらなんかおこるよ！

おこられなくても、商業も担当してるから問題ないよ。

さて、と。《世界の探求者よ、我とともに在れ》はい、これでいい？

ありがとう！さすが商人の神だね。そこに痺れる、憧れるう！それほどもない。あ、向こうに拠点作っておいたよ。世界中の本とか、あとこっちの機械を少々送っておいた

さすが、ヘルメスは気が利くね。

本当は君のほうが知識はあるはずなんだけどね

あつ……でも、私の担当は知識であつて博学じゃないもん！

似たようなものだよ。まあいいや。頑張つてね

ありがとう。またね

何とか同僚に連絡が取れた。

まさか、拠点の用意までしてくれているとは思わなかったが。

にしても自信が無い。世界1つ作ってしまうような敵にどう対処しろと？

真っ白な結界の隙間を抜けて、世界が見えた。

とてつもなく広大で、でもどこか間違っているような、そんな世界。

どうしよう。全然解決手段が出てこない。

コワセバイイ

なにか念話のような声が聞こえて、そこからの記憶は無い。

ただ、最後に、「恐怖」と「絶望」、「破壊衝動」があつたのは覚えている。

第6幕 other side 墮天、崩壊（後書き）

ご無沙汰しております、cameです。

まず、言い訳をさせてください。

最近大きなことが立て続けに起こったせいで執筆する体力が残りませんでした。

回復ポーションがあればいいのに・・・

そして解説。

ヘルメス君。ギリシャの商人とか情報とかの神様です。

エルメスというブランドの名前はヘルメスのフランス語の読みです。

また、水銀を意味するマーキュリーは英語でヘルメスを指します。

そして彼女の正体は、少しギリシャ神話の知識がある人はおわかりでしょう。

まあ、それは次回に明らかになるので楽しみに。

3・20 記号修正。直後に気付きました。

6・26 表記、内容修正

第7幕 知識の神

異端分子、発動

神の頭にあてた手から黒い膜が広がり、神を包みこんだ。
膜に吸い込まれるように、白い光も消えた。

「やれやれ……なッ!？」

思いつきり吹っ飛んだ。

何故? ……原因は即判明した。

……龍、消えて無いではないか。

思い切り踏まれている。かなり痛い。

穢れた手で主に触るな! この変態め!

「しゃ、喋れたのか。別に不純な目的があつて触ったわけじゃない。
『夢』の狂気を払っただけだ。だからその脚をどかせ、重い」

黙れ! 何故私の言葉が聞こえる!? さては貴様、邪な術で主の
力を奪ったな!?

「奪ったも何も、向こうから半ば強引に与えてきた力だ! 大体、
聞こえて無いとしたら独り言になるが? 独り言のつもりで言つて
たのか?」

……っ! うるさい! 主が貴様のような輩に力を与えるわけが
無かるう!

「本人に聞いてくれ。こっちはもうボロボロなんだ。まずはこいつ
を家の中に運ぶから、降りろ」

……主が目覚まさなければ、地獄すら生ぬるいに会わせてやる
「好きなように言え。あとでたんまり主人に怒られるだろうがな」

さて、屋内に運ぶか。

非常に軽いその体を担ぎ、（お姫様だつこというやつだろう）龍にもものすごい勢いで睨まれながらもログハウスの中に運ぶ。あんな大きいのに踏まれて良く生きていたな。

完全に足が動かない。見たくないが、今なら足の断面図が見れる気がする。

体についた土を風の魔法で払い落とし、ベッドに寝かせる。

顔にかかった髪の毛を優しく払うと、まるで少女のような顔が少し緩んだ気がした。

こんな、まるで幼い子供のような神が、世界を救うために自分をここに送ったのだ。

何故ここにいるかは分からない。だが、こんな少女がこの危険な世界に来たのだ。

そう思うと、この世界を造った『夢』とやらに対する殺意を覚えた。

「……お茶でも用意しておくか」

温かいハーブティーでも飲ましてやりたい。

部屋の中に、爽やかで優しいハーブの香りが広がる。

「ん……あ……」

「ん？目が覚めたか」

「あれ、ここは……あ、風斗」

「おはよう、になるのか？ とりあえず、飲め」

「？ ありがとう。（……え、なんで？なんで目の前に風斗？）」

「で、重要なことが二つあるんだが。」

「ん、熱い！！ 舌痛い…… 重要なことって？」

「大丈夫か？冷まして飲め。で、一つ目なんだが……」

「うゝ、分かったゝ。一つ目は？」

「名前」

「え？ 名前？」

「ああ。まだ聞いてないぞ。人にものを頼んでおいて、自己紹介もしないとは大したものだ。」

「あつ、ごめん。えっと、名前だよな？ 私は……アテネ」

アテネ。もしくは、ミネルヴァ、パラス・アターナー。知恵、芸術、工芸、戦略を司る女神で、オリュンポス十二神の一柱、だったか。

「ほう、知識の神か」

「一応ね。偉いんだよ？」

「そうか。偉そうには見えんがな」

「ひどい！ 頭いいんだよ！？ 勇者の守り神もやってるんだよ！？」

「ああ、悪かった。確か都市の守護神やらなんやら色々やってたんだが……」

「だが？」

「良い名じゃないか。それに、これからやる仕事にもぴつたりだ。勇者の守り神なものな。世界を救うなんて仰々しい仕事をするにはのにちょうどいい」

「え？……あ、ありがとう」

「まあ、戯言だ。気にするな。」

二つ目だが、さっきの事は覚えてるか？」

……大きな反応が無い。覚えて無いということか。

「ふうー、ん、ほう、まだ熱い！……え？何？」

「はあ……さっきまでさんざん暴れてたのを覚えて無いかと聞いてるんだが？」

「暴れてって、なにを……あ、が、うう……」

「ん？ どうした！？」

「……うう、大丈夫。一気に情報が入ってきたせいで圧迫されてただけ。」

「……えと、ごめんね？」

「『ごめんね？』で済ませるのか？ 足が一本消えてるし、龍には踏みつけられるし、散々だったんだが？」

「ううゝそれ以外にどうしろと？ 神は謝ること自体が少ないから分かりにくいんだよゝって、龍！？ ああ！！」

外に走って行こうとして立ち上がり、よろめくアテナ。

「おい、無理をするな。さっきまで意識を失ってたというのに」

「だって！ もしかしたら外部とつながるかもしれないんだよ！？」

「外部と……」

あの龍が外部との接続手段への手がかりだとすれば、これはかなり有益なことである。

しかし、今の状態を優先すべきだろう。一人はさっきまで気絶していて、もう一人は足が輪切りになりかけている。……断面が見えた。これはひどい。

「ふむ……神力とやらで回復することはできないのか？」

「そっか！ 何で気付かなかったんだろう！」

「ということは出来るんだな？ よし、じゃあまずアテナ、お前が治せ」

「へ？ でも、その足「見本が必要だ」なるほど、自分で治すってことね。分かった」

手から白い光が迸り、全身を包み、そして消えた。

「はい、終わり」

「……………え？」

「重要なのは治るって確信することね」

「わ、分かった……………ヒントが異常なほど少ないけど、分かった」

小刀にやった時のように手に光を集める。

前に使ったのは純粹な力。

なら、その力を治癒に、思考の方向を転換すれば……………

「おお、すごい！ わ、私でも使いこなすには3カ月かったんだけどな」

足が元通りになっていた。ついでに服も直っていた。……………服は回復に含んでいいのか？

「まあ、難しいものではないな」

「え、本職の神やつてる私たちでも扱いが難しいのに……………」

「まあいい。で、龍のところに行くんだろう？」

「そうだった！！」

ガタン、と元気よくたちあがるアテナ。どうやら神の力とやはは相当強いものらしい。

どうやら、なかなか便利なものを手に入れたようだ。

第7幕 知識の神（後書き）

2話連続投稿中のcameです。
そろそろ人物紹介書こうかな・・・

龍の名前がまだ決まってるません。
オリジナルにするか、神話からケクロプスを連れてくるか・・・
募集、してもいいですか？

さて、次はアテナの能力測定でもしましょうか。
・・・どうやって書こうか・・・
頑張らせていただきます。cameでした。

6・26 表記、内容修正

第8幕 神の使い魔

さて、「ドラゴン」とは日本語で竜と訳され、東洋と西洋によって大きく性質や見た目が変わるものである。

原始宗教などで不死の象徴である蛇を神格化されたものだと思うが、時代が進むにつれて人間の支配は自然にまで進み、しばしば悪者として神話や物語に描かれることもあった。

洞窟にすみ、金銀財宝を奪い、若い乙女を攫って食べるという習性もこの頃のものだろう。

古代ギリシャでは大きな水棲生物は全て「ドラゴン」と呼ばれたことから、水に関係が深いとも考えられる。

キリスト教において「ドラゴン」は悪魔を指す言葉であり、キリスト教の異教に対する嫌悪が見て取れるとともに悪役としての存在が広まっていくことが分かるだろう。

その一方でスラヴ神話ではメスは人類を憎み悪事を働くがオスは人類を愛し守るといふことなく身近な存在となっている。

またこの神話でのオスのドラゴンは炎の特質をもっており、現代のドラゴンの印象に根深く残っているといえよう。

このころ首が複数ある悪の存在のドラゴンはロシアやウクライナ、ベラルーシなどで伝えられた。ヒドラのような存在である。

また、ユング心理学におけるドラゴンは母親であると見ることができる。これについては詳細を説明すると長いことになってしまうので興味を持った方はユング心理学について調べていただきたい。

一般的な姿としては4足で、全身が鱗に覆われ、蝙蝠のような翼で飛行をする巨大な爬虫類といったところだろうか。

実際、翼をもつ爬虫類は存在している（肋骨が発達し、前足の部分を広げることで翼が出てくるトカゲ）が、あの巨体を翼で浮かすことは不可能に近いことから、物語におけるドラゴンの一般的な特技である「魔術」を行使して浮いていると考えられる。

ドラゴンの体の一部は特殊な能力を持つとされ、牙を埋めた地面から武装した戦士が生まれる、血を浴びたものは不死身になり鳥などの言葉も理解できるようになるなどの伝説がある。

特に、血液の持つ能力についてはドイツの英雄叙事詩「ニーベルンゲンの歌」の「ジークフリート」の伝説でも描かれている。

このように、ドラゴンというものははるか昔から人間の生活とかわってきたものである。

つまり、何が言いたいかというと、だ。

自分の見ている現実のドラゴンは、デフォルメされすぎである。

おのれ貴様、聞いているのか!?

「クロちゃん、言葉遣い」

わ、私としたことが、申し訳ございません、アテナ様！ このたわけ、じゃなかった、フウトが話を聞かないものですから……

「ああ、すまない。俺の知っている現実と違いすぎて現実逃避していただけた」

「風斗、大丈夫？ 少し休む？」

「大丈夫だ。続けてくれ。」

何故こんな状況になったかというと、まず、アテナがこのふざけたドラゴンに話しかけて、その結果もともと向こうでアテナが使役してたドラゴンだということが分かって、外部から召喚されたのであればそのルートを通して出れるのではないかということになったのだ。

ちなみにこのドラゴン、ケクロプスというらしい。

ギリシャ神話においてケクロプスとは、都市国家アテナイを建国したとされる半神半蛇の怪物だ。とはいっても、本来はただのアテナイの初代王なのだ。

上半身は髭を生やした男性で、神のような存在だった。

ポセイドンとアテナがアテナイになる前の領地を争った際ケクロ

プスがアテナを選んだことからアテナイの町の名が付いた。

つまり、だ。

神話の通りならば、ケクロプスはむさ苦しいおっさんのはずだ。
決してアテナを「主」と崇める若干変態的な女性のドラゴンではなかった。

メス、ではない。女性なのだ。本人曰く、「神に重要なのは姿形ではない。内面が変わらなければ外側はいくらでも変えられるのだ」らしい。

それにアテナを選んだというだけでアテナに仕えていた記憶は無い。

……色々間違っている気がする。ギリシア神話のゲシュタルト崩壊だ。

……つまり、私自身はアテナ様の内側に入っただけで、そのままこちらに来たので（わ、私がアテナ様の中に……／＼）、外部から召喚されたわけではって貴様また聞いてなかったな！？

「風斗、本当に大丈夫？」

「ああ、アテナイの町がどうなったのかについて考えていただけだ」

たしかポセイドンが泉から馬を作りだし、アテナがオリーブの木を生み出して、市民がオリーブ油の方が有益だと判断したんだっただか？ 今のギリシア共和国の首都だったはずだが、こいつらがいるならアテナイもそのまま保存されているはず。確証はないが。

ほう、私とアテナ様の馴れ初めを知っているのか。あの町なら今頃天上界にあるんじゃないか？ ですよ、アテナ様？

「うん。多分、向こうに保存されてると思う。にしても、良く知ってたね」

ギリシア神話関係は昔かなりはまったからな。大分忘れたが。

にしても私を送り込んだ神が昔の趣味で調べたなかで一番のお気に入りでだとは思わなかった。

「ああ。たしかケクロプスは髭の生えたおっさんだった記憶があったんだが。そのあたり、どうなんだ？」

あ、あれはアテナ様の好みの男性について色々考えた結果あんな姿になったんだ！ 黒歴史だ！ 忘れる！

また踏まれかけた。これは聞かない方がいいかもしれない。

「クロちゃん、言葉遣い」

申し訳ございません。黒歴史だったものですから……

クロちゃんなどと愛称までついている。威厳などあったものではない。

ん？ なにか無礼なことを考えなかったか？

「考えていない。だからその脚をおろせ。おい、そのままおろすな！ 潰れる！ 殺す気が馬鹿！」

どうせアテナ様から頂いた力で治すのだろう？ なら少しぐらい八つ当たりしてもいいじゃないか

「クロちゃん、危ないから！ 非常に危ないからそれ！ 君の八つ当たり普通に死ねるレベルだから！」

胃痛の種が増えた。

「で、話を戻すぞ。結局外部とはつながらないのか？」

私はアテナ様の力によってできているようなものだからな。アテナ様がつながらないのなら私もつながらない

「そうか。ところで、アテナの力でできているといったな？」

ああ、そうだが、どうかしたのか？うらやましいのか？ アテナ様の中に入るのは私の特権だからな？

「黙れ変態。俺が言いたいのは、俺の力でもお前のような存在は出来るのかということだ」

「なるほど、使い魔か。出来るんじゃないかな？」

「使い魔、か。本格的にファンタジックだな」

課金アイテムの部類に入るのだろうか。

成績が上位なこともあって何かと勘違いされがちだが、天鐘家は全員かなりのゲーマーである。しかも手広い。有料オンラインから家庭用まで、すべて取り揃えている。

我が家で某友情崩壊資産運用ゲームをやると、父が物件を買い漁り、母が超強運で目的地入りを連発し、自分がカードで妨害し、長谷川さんが貧乏神を持ち続けることになる。一度それで長谷川さんがいじけたのはどうでもいい話だろう。

まあ、この世界に來た驚きが少ないのも異世界もののファンタジーに慣れているからだだろう。

「で、詳細を聞きたいんだが」

「ん。使い魔には、クロちゃんみたいに元から存在していた生き物に自分の力を与えて使い魔にするタイプと、私の梟みたいに本人の心から力を使って具現化するタイプの2種類あるの。

元から存在している方のやり方だと、使う力が少ないのと、使役する本人が弱くても強い個体を持てるのが利点かな。

その代わり、個体の能力に大きく左右されるから、強い神獣とかに頼むとか、強い個体を得るのが重要。

で、もうひとつの具現化するタイプは最初に使う力も多いし、本人が強くないと使い魔も強いものが発現しないけど、大きな利点があるの。

それは、元の個体が必要ないことと、生物でなくても使い魔にな

ること。

ポセイドンの持つてるトライデントも使い魔だよ。
元の個体が必要ないってことは力が尽きない限り何度でも出すことができるということ。

まあ、普通は元からいた生き物を使役する方が楽だから多いんだけどね。

ここまででは分かった？」

「大丈夫だ」

「で、風斗がやるのは具現化する方。

この世界の生き物が使役できるのかどうかまだ分からないし、風斗の力ならそのくらい簡単にできるんじゃないかな？」

「なるほど。で、やり方について教えてほしい」

「普通は悩むところだと思うんだけど、即やり方を聞くんだ。まあいいや。それじゃあまず、目を閉じて、深呼吸して」

深呼吸すると、肺が日本とは違う澄んだ空気で満たされる。

目を閉じているのもあって、深い森の中にいるように錯覚する。

「自分の心の奥を覗くような感じで、自分の精神のあるべき形を意識して」

必要のない関係を切り捨て、必要のない存在を切り捨て、必要のない気持ち切り捨てる。

孤高、穢れ無き黒。白になれない存在。それは対極、陰と陽の相克。

天空に、暗闇に潜む神秘。

闇は悪でなく、光は善とは限らない。

善なる闇に、導きを……

……ん？なにか、声のようなものが。

詩なのか、呪文なのか、いや、神父の祝福にも思える。

しかし神の祝福にしては皮肉だな。闇を悪と決め付ける一神教が善なる闇に祝福を与えているわけだ。

「何か声のようなものが聞こえた」

「それだよ！それが風斗の精神のあるべき姿。ペルソナみたいなものかな？」

声に出して唱えてみて」

「分かった」

孤高、穢れ無き黒。白になれない存在。それは対極、陰と陽の相克。

天空に、暗闇に潜む神秘。

闇は悪でなく、光は善とは限らない。

善なる闇に、導きを……

物語は続き、導かれた闇は光と交わる。

かつての太陽はやがて黒へと染まる。

無限の光などなく、光なしに闇は見えず。

ならば我等は進もう、有限の光のなか、その目に闇を焼きつけるために。

黒の導きを我等に、天を照らす光が尽きるまで

呪文の詠唱をしたときのように体から力が出ていく。

しかし呪文の詠唱をしたのと違ってかなりの量だ。

少々倦怠感を感じるほどの力が一か所に集まり、

初めまして、我が主人

そこにいたのは一羽の鴉だった。

「なるほど、鴉か。初めまして。俺がおまえの主人の天鐘風斗だ」
風斗様、よろしく願います

「風斗でいい、敬語も必要ない。名前を聞いてもいいか？」

敬語は……善処します。名前はまだありません

敬語を話すこの鴉には足が三本あった。

……三本？

「お前、八咫鳥か？」

はい。神の力で生まれましたから

なるほど……。

さて、名前、名前、名前……。名前に関しては前科があるから苦
手なんだが……。

「お前の名前なんだがな……」

名前、ですか？

「ああ。黑夜とかどうだろうか」

八咫鳥なのに夜とはこれいかに。太陽神アポロンの怒りを買って
堕ちたからす座のからすであり、太陽の化身であり……まあ、昼と
夜は裏表だ。

ネーミングセンスが欲しいな。

良い名前だと思います

「え？ ああ、いや、お前が気に入ったならそれでいいんだが……
本当にいいんだな？」

主の決めた名前です。それに、悪くないと思いますよ？
「そうか。ならいい」

それでは、これからよろしく願いしますね、風斗様

黑夜は翼を広げて一声鳴くと、一枚の羽根を残して消えた。

「良かったね、風斗」

貴様の使い魔だから野蛮かと思ったが、割とまともそうじゃないか

「ああ、予想外だった。八咫鳥とはな。まあ、ケクロプスのような変態じゃなくてよかった」

誰が変態だ！

「否定するのか？」

自覚していると思っていたんだがどうやら違うらしい。

当たり前だ！

言いきった。本当に自覚していないらしい。重症だ。

「まあまあ、落ち着いて、クロちゃん。

にしても八咫鳥なんて、久しぶりに見たよ。アポロンのお馬鹿ちゃんは報告ミスしただけのカラス君に八つ当たりして追い出しちゃったしさ。

あ、黑夜ってどういう意味なの？」

「単純に、黒い色から夜を連想しただけだ。」

馬鹿め、鴉が夜に活動できるわけがあるまい

「妖怪が夜以外にいつ活動するんだ？」

あ……………

「あとは、太陽の化身ということとかも考慮して、かな？ まあいい。で、使い魔の召喚はどうやるんだ？」

「さっきの呪文みたいな詩みたいなあれ、まあ、神詞を唱えるか、

体の一部に触れて念じるか。普通は体の一部を持ち歩くよ」

手元の羽根を見る。

混じりけのない純粋な黒。光が吸い込まれているように感じる。八咫鳥、か。どんどん常識から外れていくな。

しかもあれが自分の心のあるべき姿らしい。

まあ、世界をひとつ背負ってるんだ。これくらい当たり前か。

自分の思想に思わず苦笑しながら、真っ黒な羽を腰のベルトに挟んだ。

第8幕 神の使い魔（後書き）

珍しく長くなっていました、cameです。

以前ここでタイトルについて質問を出しまして、結局変更しました。

ちなみにヤタガラスは太陽の化身だったりします。遊戯王の禍々しい感じに違和感を覚えますが、まあ解釈は人それぞれ、ってことで。

3・30 メールフォームなるものを作ってみました

came・ambystoma@gmail.com

6・26 表記、内容修正

幕間劇 第3節 異変、手がかり、接続（前書き）

リアルが忙しすぎて遅くなってしまう：申し訳ないです。
しかも番外です。忙しいときは番外になることが多いようです。
ですが、かなり重要なところだったりします。
では、またあとがきでお会いしましょう。

幕間劇 第3節 異変、手がかり、接続

時間の流れというものはとても曖昧なものである。

実際、楽しいと感じている時間とつまらない時間とでは流れる速さが違う。

感じ方の問題なのかもしれない。しかし、感じ方によって変わるようなあいまいなものの単位など信用できるものなのだろうか。

人間が定めた単位ではない時間。今はそれがとてもゆっくりと進んでいる。

とても速く進むのであろう？楽しい時間？を感じることは、昔はとても少なかった。

しかし、この高校に入り、ある存在と出会って変わった。

浪本絵里、乃木春海、そして天鐘風斗。

この3人と一緒に入る時、人並みの楽しさを感じることができた。しかし、今はその楽しさに少しの寂しさの感情が混ざる。

天鐘風斗。彼がいなくなって1週間たつ。

行方不明となっているが、そんな甘いものではない。
いないのだ。この世界に。

「冬彦、帰るよ。」

「冬彦君、支度終わった？ 今日帰りに風斗君の家に寄って行くと思うんだけど、来る？」

「……今日は所用がある」

恐らく、このままでは見つからない。

情報が必要だ。正確で、なおかつ膨大な。

「そっか。じゃあね、また明日！」

「それじゃあ、お先に失礼するね。また明日」

「また明日」

少し残念そうな顔をしていたが、手を振って教室から出てゆく。
荷物をまとめて、急いで自分の家に帰る。

誰もいない、いるはずが無い。独り立ちして既に2年がたち、迎えてくれる人がいないことなど慣れてしまった。

稲本。自分の名字であるこの二文字は日本の暗部では非常に有名なものである。

日本で続く非常に貴重な平和にも必ず裏がある。そこに潜んでいるのは暗殺者、テロリストといった犯罪の中でも最も重い部類に含まれる仕事を行う職種の人々。

それよりも、更に深い闇に潜んでいるのは非現実的な力を持つ者たち・・・いわゆる超能力者や魔術師だ。

決して現実には存在しない、いや、存在してはいけない力。

だがしかし、今の現実に必要な力。

矛盾している。だが、それが現実。

日本にも、魔術師に近い印象を持たれる職種がある。

陰陽師である。

実在した官職であり、陰陽五行の思想に基づいた陰陽道によって占術や呪術、祭祀を行う技官。

そのなかで、現代まで続く陰陽師の家系の一つが稲本である。

その中でも自分は能力がずば抜けていた。かつての賀茂忠行や安倍晴明と同等といっても過言ではない。

4歳にして陰陽道について完全に理解し、7歳で火事を収め、百鬼夜行を滅するなど、神童と言われてきた。

高校生となった今でも、陰陽師としての仕事は一流であり、報酬も非常に高いことも相まって、その道ではいい意味でも悪い意味でもとても有名である。

だが、今から行おうとしているものは自分でも成功するか分からない。

なにしろ、神を喚ぶのだ。現実の世界に。
ろうそくで照らされた机の上にはアンプルの中に入った水銀、陰陽道の象徴である五芒星。

我、開く

机の上の空間が歪み、紫色のうねりが見える。神の世界との間にできた小さな隙間。

道は続く、虚空へ。

時は進む、永遠へ。

汝へと、我は繋げる。道を、時を、世界を

真っ白な空間が見える。繋がるのはギリシャ神話の神々の世界。

我、問う。私の旅を照らすために

水銀が輝く。依り代としての役目は果たしてくれたようだ。

「……おやおや、久しぶりに喚ばれたから来てみれば、男の子一人なんて、驚きだよ」

そう言って肩をすくめる青年。頭には茨の冠。身に纏うのは白いローブ。

隙間から全身を出す。両足に輝くのは翼の生えた靴タラリア。

「で、なんの情報欲しいのかな？」

「あっさり教えていいのか？」

「ものによるけどね。糞じ、んんっ、お父様がだめって言うてるものは駄目」

「分かった。」

では、問う。天鐘風斗はどこにいる？」

「……どういうことかな？普通の人間くらい、陰陽術で探せるだろう？」

「質問を変える」

「諦めるの早いね」

「諦めていない。」

天鐘風斗はこの世界にいる？」

「……そこまで知ってるんだ。なら、問題ないかな。」

彼がいるのは下層世界の一つ、「夢」が作った世界だよ。」

「一緒にいる者は？」

「アテナがいるよ。彼女が連れて行っただ」

「次の質問に移る」

「普通そこは驚いたりするところなんだけどな……」

「彼がこの世界から消えてから時間の流れが変わった。説明を要求する」

「そこまで分かってるか…驚きだよ。」

彼が向こうにいったことから、時間の流れを遅くしてる。浦島太郎、といったっけ？あんなの嫌なものね。ゼウスの糞じ、ああ、いや、なんでもないよ。ゼウスが命令出して世界中の時間の進みを緩める状態」

「では、最後。」

その世界に行く。一緒に来てほしい」

そして、世界は再び繋がる

幕間劇 第3節 異変、手がかり、接続（後書き）

さて、まさかの日常にも非日常。知ったら風斗君啞然です。
ヘルメスとアテナのペアは結構有名だったりします。

感想が欲しい今日この頃。まあ贅沢な願いということでしょうか。

そして新作に手を出しそうです。

まだこつち完結の目処が立ってないんだけどな…
たぶん100話は越えますよ。軽く。

さて、現実疲れ始め、空想に憑かれ始めたcameでした。
次回、またお会いしましょう！

6・26 表記、内容変更

第9幕 お互いの世界、お互いの思想、お互いの覚悟（前書き）

ようやく復帰・・・申し訳ございません

第9幕 お互いの世界、お互いの思想、お互いの覚悟

カリカリカリ。

カリカリカリ、カチッ。

シャーペンが紙の上を走る。

黒鉛が自らの軌跡を紙に残し、記録となる。なんてかつこよくまとめてもただシャーペンでノートをまとめているだけだが。

ときおり、正面に置いた本のページがめくれ、それをまたまとめる。

………はあ。疲れた。

何をしているかというと、絶賛勉強中である。

きっかけはアテナの、

「ごめん、もしかしたら通貨とかいろいろ違うかも。観測してたのは『アリス』が4番目まで入った後だから、ちょっと今はどうか分からない」

という発言だった。

そこから、どうせやるならまとめて全部、という思想に繋がり今に至るわけである。

魔法について、国について、経済について等々。

魔法陣の書き取り、経済の仕組みについてのまとめ、単位や通貨などなど、生活に困ることが一切ないように必死である。

やることが多い……なぜ能力に完全記憶と速読がないんだっ！

「風斗様、お茶をお入れしました」

「ああ、ありがとう」

「あ、ずるい！ 私も！」

「はい、どうぞ」

黒夜が入れてくれたお茶を飲む。

……？なにか、重大なことを忘れてる気が……

「なあ、黒夜？」

「なんででしょうか？」

「いや、いつの間に人間になったのかなあ？」

黒夜だと分かる、分かるのだが……

自分の横で首をかしげて微笑む少女が、黒夜？

黒い振袖、赤い帯、長い黒髪。

どう見ても大和撫子だ、本当にありがとう。

ああ、おかしい。文字を見続けたせいで頭が壊れてしまった……

「風斗！　口調！　口調変わってるから！　ああ、どうしよう、風斗が壊れた！」

「ああああ……ん、大丈夫だ。で、黒夜は一体どうして人間の姿になれるんだ？」

「形など不確かなものですよ、風斗様。

もともと風斗様の心から具現化されたものですから、形はいくらでも変えられるのです」

「なるほど……どんな仕組みなのか……興味深いな」

服はどこから出てきたんだ？まさかそれすら自分の精神とやらか？いや、ロリコンじゃない、はず……にしても仕組みが気になるな、解体しては駄目なのだろうか？ああ、疲れも溜まってるし、せつかくの機会だ、頼んで解体してみようか？ああ、でも元に戻るかどうか心配だな……まあ、地下の設備なら大丈夫か？ああ、でも解体したあとパーツごとに保存しておきたいし……

「あ、あの、風斗様？ 何故か恐怖を感じるんですが……」
「ん？ いや、大丈夫。きつと元に戻る。形が不確かなものなら解体したって生きてられる、よな？」

「いや、絶対無理です！！」

「風斗、どさくさにまぎれてサボるな！」

脳天に一発食らった。何故神力を纏わせた………バタリ。
いや、別に死んではいないのだが、言う必要があった気がするのだよ。

「……ねえ、風斗」

「ん？ なんだ？」

「どうして、怒らないの？」

「脳天に神力纏わせて鉄槌食らわされたことか？ そりゃあ痛いが、怒るほどの事じゃ「そういうことじゃない！」怒鳴るな、頭に響く」

「どうして……こっちに送ったこと怒らないの？！ 普通の生活からいきなり切り離されて、自分の知らない世界に送られて！！ どうしてそんな「自分で頼んだことを否定する気か？」……え？」

「俺はお前から依頼を受けたからな。世界をどうにかしてくれ、アリスを救ってくれとな。」

それを、自分が頼んだことを否定するのか？」

アテナはうなだれた。手元の紙にぽつり、となにか水のようなものが落ちる。

「でも…私が勝手に頼んで、命の危機にさらされるかもしれない、もしかしたらもう元の世界に戻れないかもしれない、なんて…思わないの？ 怖くないの？」

一瞬だけ、想像する。そこにいるのは、元の世界の仲間。自分の

死はそこには存在しない。

「怖いかと聞かれれば怖いと答えよう。」

だが、命の危機にさらされる？ 元の世界に戻れない？ そんなことは起こらない。

俺には、元の世界に帰れる。なぜなら、想像できるからだ。

人間は実現できることしか想像できない。だから、帰れる」

「でもッ!!」「それに、よく考えてみたらどうだ?」「……え?」

「伝説の神が一柱、その神に選ばれた人間が一人、神話の龍が一頭、美人の使い魔が一人。」

これで失敗しろという方が難しいだろう?」

「……そう、だね。少し、気弱になりすぎてた。ごめん」

「謝ることじゃない。で、渡したいものがある」

机から一度離れ、外に行く。腰が痛い、背中が痛い、首が痛い、何より「何雰囲気ぶち壊してるの?」という空気が痛い。

手に取るのは? 畏怖と決意の宝剣?。差し出し、そして跪く。ちよつとこつという時ぐらい、カッコつけてみてもいいだろう?

「これが、俺の覚悟だ。受け取れ」

「えつと……分かった。これからも、よろしく……? ああもう、何この中途半端なしんみり感! こういう時どうすればいいか分からない……」

「笑えばいいと思うよ。」

「それは違うと思う。」

うーん……あ、やったねアテナ、友達が増えるよ!」

「おいやめろ」

いいかげんそのコント終わりにしろ!

「あ、クロちゃん居んだ」

ひどい! いや、そういうプレイですか! そういうプレイなので

すね！？

「黙れ変態」

だまれ！そもそも、貴様がいなければ「もし俺がいなかったら他の人間がここに来てただろうな」くっ……

「風斗様、お茶を入れ直しましょうか？」

「ああ、ありがとう。すぐ戻るよ。」

「ええ、またあの書類の山に埋もれるの！？」

どうやら、今日も平和なようだ。

「あ、そうそう。さつき元の世界のやつと会えないかもしれないと言っていたが、なかなか理不尽な連中だからな。あっさりこっちにくるかもしれないぞ？」

「ええ！！　嘘！！」

「本当だ。本当だから畏怖と決意の宝剣を振り回すな！　危ない！」

訂正、なんだかんだいって死にかけそうだ。

そのころ黑夜は……

「美人の使い魔だなんて……そんな……風斗様……／／／」

お茶を思いっきりこぼしていた。

第9幕 お互いの世界、お互いの思想、お互いの覚悟（後書き）

お久しぶりです、地震やら学校の仕事やら人間関係のごたごたやらで気付いたら5月になってました、c a m eです。

私に言えることはひとつ・・・4月って忙しいですね。

・・・ごめんなさい。

クオリティーは崩壊レベル、字数は少ない・・・ごめんなさい・・・。

どうかこれからも見捨てず読んでやってください・・・

6・26 表記、内容変更

ノート 異世界について（前書き）

ご無沙汰しております、cameです。

色々とごたごたに巻き込まれたり、働かされたり、堪忍袋の緒が切れたりした結果遅くなっていました。申し訳ないです…

今後数週間〜2カ月程度不定期更新になりそうです…

では、本編は進みませんがどうぞ…

ノート 異世界について

【魔術】

・魔術とは

魔術Ⅱ 自らの想像を力によって具現化するもの
力さえあればどのような魔術も行使することが出来るというわけではなく、適性、土地の精霊量などによって使えるものが決まる

3 大要素 魔力、精霊、呪文

魔力Ⅱ 精霊を集め魔術を行使するための力、通常は触媒（杖など）を通して取り出す

（何故か普通に体から出せる、要調査）

精霊Ⅱ 魔術の行使に必要なエネルギー体 不可視

（何故か私は見える、今後魔導書と話し合う必要あり）

呪文Ⅱ 精霊の量の調節、想像の方向性の確定

・魔術の属性

6 大属性：光、火、水、風、土、闇

特性 光：創造、復活

火：燃焼、高熱

水：湿潤、再生

風：大気、速度

土：大地、錬金

闇：破壊、終焉

その他の属性：氷、雷、草、毒、重力など

神話の中の属性：神属性

（備考：神力と関係あり？）

・基本的な魔術

光…灯火（明りをともし）、光の加護（回復力が上がる、無生物にも使用可能）

火…火種（火をつける）、火球（火の玉を飛ばす）

水…雫（少量の水を出す）、水球（中に含んだ生物を回復させる）

風…清めの風（その場の空気の浄化）、瞬風（瞬間的な速度の上昇）

土…土くれの案山子（サンドバック作成）、練金（物質の等価交換の上での変化）

闇…基本魔術なし（高難易度、適性能力者が少ないことが原因？）

考察…火、水、風が日常生活で役立つ？光の魔術は使える人間自体が少ない

・魔法陣

魔法陣…魔術を行使する際地面などに魔力を付加した繊維や塗料で魔術を記すこと

魔力の線で作られた特殊な図形、精霊を集める古代文字（アルファベット？）の呪文を記す

メリット

- ・初心者でも無詠唱で発動可能
- ・複数人数での発動可能　大きな魔術でも行使できる
- ・発動時に魔力を消費しない

デメリット

- ・作成に時間がかかる
- ・現在魔法陣での記し方が判明していない魔術あり
- ・地面に書く場合その場所を対象を誘導する必要がある

・魔法具、魔導書

杖や宝石、書物を媒体として、魔術を設定し行使することができる。日常生活に役立つ魔術を先に設定して売るといったことが可能であ

る。

メリット

- ・魔法陣より携帯しやすい
- ・目立たず使用できる
- ・武器にも設定することができ、戦術の幅が広がる
(考察：剣の切先に貫通力を上げる魔術、刀身に剣速を上げる魔術、柄に回復力を上げる魔術、などと、部分ごとに効果を設定することも可能ではないだろうか)

デメリット

- ・大きな魔術を行使出来ない
- ・一つの魔法具で一つの魔法しか行使できない

【地理】

- ・世界の構造

世界名：シュタイン

陸と海の比率：6：4 海の中央に大陸が1つ、列島が1つある形

共通語：シュタナ語（日本語）

通貨：円

文字：ひらがな、カタカナ、漢字 古代文字としてアルファベット

宗教：創世神を崇拝するシュタイン教

地形：大陸の中央に走るフロスト山脈、南のレウムの森、西のエニグマ砂漠、東のジェムル湖

- ・国

ウィーストーン帝国：フロスト山脈とレウムの森に囲まれた南の内陸国。軍部が強い発言力を持っており、それは初代皇帝が自ら戦地に赴いた戦士であったことが強く関係している。

人々の気質は勤勉で熱血的、やや頭が固い。特産品は刀剣類や甲冑類、フロスト山脈から採れる希少な鉱石や茸など。

エウル共和国：東北の海に面している。以前はエウル帝国として独裁政治が続いていたが最近研究の自由を求める革命によって共和国となった。そのため現在内政が安定しておらず、徐々に派閥争いなどが始まっている。

人々の気質は良くも悪くも学者肌。特産品は塩、魚類、薬品、大型兵器など。

グラナート連邦：北の小国が集まって出来た連邦国家。軍事国家であり、国内の情報がほとんど漏れてこない。国家元首はクロフィードと名乗る宰相が380年間ずっと代理を務めている。

人々の気質は無口、冷静。特産品は書物、毛皮、穀物など

ステイリア・マオシス連合王国（通称ステイリア王国）：大陸の東部に浮かぶ島国。刀という特殊な武器を使う。また、独特な文化を有している。芸術や学問に秀でており、公用語も彼らが編み出したものとされる。

人々の気質は勤勉、清楚、努力家。特産品は絵画、楽器、書物など（考察：大日本帝国、イタリア、ドイツを混ぜたようなイメージか？）

その他小国：グラナート連邦とジェムル湖にはさまれた地域やウィーストーン帝国付近の沿岸など。

エニグマ：先住民族であるエルフがエニグマ砂漠のオアシスで目撃されたらしい。彼らの都市がある可能性がある。

フロスト：フロスト山脈の地下にはドワーフたちの国があるらしい。

レウム：レウムの森の中には獣人の村があるらしい。

ジェムル…ジェムル湖の湖底には巨大な国があるという伝説がある。

【世界情勢】

ウィーストーン帝国…領土拡大中。グラナート連邦を警戒？

エウル共和国…他国に目を向ける余裕なし？不穏分子の活動が活発。
グラナート連邦…不明。周囲の小国を多数吸収。

ステイリア王国…中立。内政と芸術に勤しんでいる。

その他小国…ウィーストーン帝国に吸収されるかグラナート連邦に吸収されるか。一部が中立の立場を表明しているが、軍事的に考えて吸収は逃れられない。

【経済、文化】

・経済

第一次産業はウィーストーン帝国が、第二次産業はエウル共和国がリード。

グラナート連邦は国内ですべて賄われている。

ステイリア王国は第二次産業、第三次産業が安定しているが、島国の為、第一次産業は貿易に頼っている。

・文化

国民の多くが読み書きができる。（考察：非常に文化水準が高い）
衛生管理などの概念もしっかりしており、大きな都市では上下水道の配備もされている。

芸術、絵画、学問の道を志す者は必ずと言っていいほどステイリア王国に向かうといわれるほどステイリア王国では芸術や学問の文化が発達している。

学校は大きな都市にしかないが、寺子屋や塾は地方に多く存在して

いる。行商人や吟遊詩人が泊まった村で授業をする場合もある。（
考察：吟遊詩人が職業として成立している）

考察：文化水準は高いが、時代背景としては中世ヨーロッパと世界
大戦の時代を混合したようなイメージを持った。

宗教は一柱を主神とした多神教で、キリスト教よりはギリシャ神話
のような神の崇拝の仕方だと考える。

戦争や内乱、革命の可能性が大きく、社会情勢は安定していないと
思われる。介入、妨害ともに容易だろう。

ノート 異世界について（後書き）

さて、お久しぶりです。このあとがきを読んでいる人は、果たしていらっしやるのでしょうか。c a m eです。

今回はこの間の勉強会の際の風斗君のノートです。どうも中途半端ですが、設定資料の一つとしてもお使いください。

しばらく更新が不定期になります。書き方なども変わる可能性があります。気が長に待つて頂けると嬉しいです。

・・・あ、待つて頂くほど定期的に読んでくださる方がいらっしやればの話ですが。

もしなにか質問などございましたら感想、もしくはメールフォームの方によりしくお願いします。

それでは、できる限り早くお会いしましょう。c a m eでした。

6・26 表記、内容変更

第10幕 力とは（前書き）

……ご無沙汰です、c a m eです。

なんというか……随分空いたね、うん。ごめんなさい……

いや、受験生なの、つまり、夏休みから休みが欠如してるんです。
あれ、それただの夏じゃない？

……まあ、ちょっと今回は長め、かな？

第10幕 力とは

かつて、ローマではコロッセウムで剣闘士達が戦い、人々はそれを見て楽しんだ。戦国時代の日本では武将達が天下を取るために鎬を削り、多くの命を散らしていった。今も世界ではどこかで戦争が続いている。その原因が土地か、宗教か、金か、それとも他のものなのか、俺には分からない。

ただ、ここまでの流れから見ると、大小にかかわらず争いは無くならないということが分かる。そして 人々は、心のどこかでそれを楽しんでいる。

戦って散る者、見て楽しむ者、それらを操り動かすもの。

俺はここでは戦って散るのか、操り動かすのか。

少なくとも、何もせずに散ることはないと思いたい。

さて、こっちの常識はあまり分かっていないが何となくファンタジックなところであることは理解した。

で、自分がしっかりとそのファンタジックなパワーを使えることも理解した。

だが、まだ忘れていたことがあった気がする、というかあった。以前、こんな会話があった。

「ところで、『アリスは何らかの能力を持って『夢』の作り出した世界で生活することになる』と言っていたが、自分の能力はどうなるんだ？」

「向こうに行かないと分からない」

「いい能力であって欲しいものだ」

……能力ってなんだ？

実はもう、心当たりがあったりする。

アテナはこっちに來た時あの真っ白空間と同じ格好をしていた。だが自分は大分違う。

つまり、この格好にヒントがあるとみて間違いない。

そして、契約名とやらにある？ 双刀の死神？ も怪しい。

以下の事から考察して、自分の能力は、この二振りの小刀なんじゃないだろうか。

……小刀？ 短刀？ ナイフ？ いや匕首か？ どれだ？ 双刀だし、小刀って言った方がいいのだろうか。鐔あるし。

この小刀、クロ（本人がこう呼べと言ってきた、意外だった）にたたきつけても折れなかった。明らかにおかしいだろ、これ。

というわけで実験。

その1、超高電圧をかける。

刃に稲妻が帯電してカツコいいことになった。机が吹っ飛んだ。脛に当たって非常に痛かった。

その2、槌子の原理で曲げてみる。

乗つけた岩が割れた。というか斬れた。

その3、クロに踏んでもらう。

「変態か、お前は」

「いや、俺じゃない、この小刀だ」

「……何がしたい」

「いや、曲がるかどうか「私が重いと言いたいのか、そうかそうか、死ね！」実際重かったじゃないか、って危ないから踏むな馬鹿！」

結局曲がらなかった。

なんだこの化け物小刀。略して化け刀。妖刀か、って違うだろ。

あ、片方テーブルの上に置きっぱなしだった……微妙に手が届かない。

シュ、パシン。

……飛んできた。刃の方からじゃなくてよかった……じゃなかった。

何故飛んできた！ what's up!？ 説明を求む！

……落ち着け、落ち着くんた。恐らく、これがこの小刀の機能と考えるべきだろう。

つまり、思うだけで手元に戻ってくる？フルオートブーメラン？それを人はチートと呼ぶ。なんじゃそりゃ。

……あれ？ちよっと前にこの双刀落としてクロに追い詰められなかったか？

能力を知らなかったからか。そうか、自分の苦労は何の価値もなかったのか。

まあそれはいいとして、これが能力ならアテナも何かしら持つてるだろう。

「アテナ、ちよっと時間ある？」

「有り余ってる、暇、ねえ、風斗ゲーム持ってない？」

先ほど実験で吹っ飛ばした机の二本の脚にそれぞれ自分の足を乗つける形でたつてイナバウアーをしている。バランス感覚はすごいと思うがはしたないからやめさせよう。というかどんだけ暇なんだこの幼女神。

「地下室のパソコンに入ってたと思うぞ。まあそれはいいとして、能力のカード出してみてくれ」

「カードおゝ？なにそれゝ」

「……気が抜けるからその喋り方終わり。自分の力を見たいと思えば出てくる、と思う」

ポン。

相変わらず気の抜ける音だ。

カードの情報

名前：アテナ

契約名：？アイギス石首の破魔楯？

ステータス：

筋力：B＋

頑丈：B－

器用：A＋

知力：A

精神：A

俊敏：B

特殊技能：

・神力

世界神の力を操る能力

・イレギュラー異端分子

『夢』の狂気に干渉されず、『夢』の狂気を抜う能力
・召喚

使い魔召喚の能力

……能力値のインフレについてはこの際いいでしょう。能力だ、能力が今は重要なんだ。

……まあ、アイギスといえればあれだな、最強の盾。メデューサの首埋め込んだんだったか？

「アイギスって……でもどこにも持っている様子が見られないんだが」

「ああ、あれね、今は結界状態なんだよね。だって盾って使いづらいじゃん？ デザインは悪趣味だし、片手埋まるから私の戦法にはあわないんだよね。そもそも敵を石にするとか鬼でしょ。その分結界状態だと両手使えるし不意打ちにも対応してるし、あと地味に発動時のデザインきれいなんだよね。なんていうか、こう、神聖な感じの魔法陣が攻撃された部分に出る感じ？ まあ起動には起動言語アクセスキーが必要なんだけど、盾をいちいち動かすより効率いいしさ。というわけで盾として使うことは実際ほとんどないんだよね」

……一息にここまでの解説、ご苦労様なことだ。

「あくせすきー？ なんぞそれ」

「効果を発動させるためのパスワード的なもの、とでもいえばいいのかな？ 風斗のその双刀も起動言語アクセスキーありそうだね。私のだと、こんな感じかな？」

【その蛇は鎌首をもたげ、強者の威光を示した】

アテナが仄かに白く輝いている。戦闘時のあれか。

「どう？　きれい？」

「……いい」

「え？」

「素晴らしい！不可視の力か、なかなか応用性が高い！言葉によって起動……言霊との関連性も調べてみる必要があるな……これなら神力にも期待できそうだな！しばらく研究室にこもる必要があるな、これは！パソコンは出しておくから、しばらく暇を潰していてくれ！」

「え、ちょ、風斗、どうしたの？」

何かアテナが言っていた気がするが、まずは調べてみなくては。久しぶりにわくわくしてきた。……わくわくなんて言葉、初めて使ったな。

その頃アテナは

「え……行っちゃったよ……自分の発動言語聞かなくてよかったのかな……？　まあ風斗なら自分で見つけそうな気がする。クロちゃん、ゲームやる？」

数分後、そこにはブルーベリー色の化け物に悲鳴を上げる二人の少女（？）の姿が！

暗い部屋の中でひとりぼっち。何をしているかというと、

「神力……まずは特性を調べる必要があるな」

ただいま研究中、という感じだ。

といっても、神力の特性を試す方法……いろいろ試してみるしかないか。

数日後。煤だらけの部屋の中でひとりぼっち。

……まさか神力が電気だとは思ってもみなかった。意識するだけで電圧の値は自由自在。なかなか面白い。

まあそのおかげで近くの金属片がコロナ放電起こして大量のオゾンが発生して慌てたり、マグネシウムに火花放電でファイヤーして天空の城の王様候補状態になったりしちゃったわけなのだが。

だが、電気だ。電気なのだ。つまり、

「E M L無双だ!!」

E M L、E l e c t r o M a g n e t i c L a u n c h e r。

直訳すると電磁砲。まあつまり電磁加速砲の事だ。レールガン、サイマルガン、コイルガン、その他諸々。大体がちよっと洒落にならない威力を持つすごい子達なのだが、少々構造が難しく、必要な電気も持ち歩けるサイズのコンデンサでは無理だったため、歩兵サイズにはなれなかった可哀想な兵器。だが自分から電気を無尽蔵に発生させることができる、それすなわち、高性能なスイッチングが必要なく、なおかつ無駄に重いオイルコンデンサなど必要ない！最強兵器と成り得るのだ！

……落ち着け、落ち着くんだ自分。

この条件下で最も威力が高いと考えられるのはレールガンだろう。伊達に有名になったわけではないのだ。

だが、ここでレールガンを作るとは考えていない。作るのはずばり、コイルガン！

中学生以上なら誰しも名前だけは聞いたことがあるだろう、「右ネジの法則」という法則がある。極限まで簡単に説明すると、コイルガンというのはこの法則を使ってコイルから弾丸を打ち出す兵器だ。

コイルガンの特性として、「無音」と「高重量高トルク」という点が挙げられる。

実際はそこまで無音というわけでもないのだが、非常に小さな音で射出することができる。

また、レールガンは軽い弾を低トルクで射出するがコイルガンは重い弾を高トルクで射出するのに向いているのだ。

消耗もしにくく、レールガンは数十発撃った時点でバレルが駄目になってしまいがコイルガンは何千回、何万回といった射撃回数にも耐えられる。

というわけで結論、コイルガンはすごい！

さらに数日後

「フフ、フハハ、ついに、ついに完成した！」

目の前にあるのは1m50cm程度のサイズの狙撃銃。

だがそれが銃であるのはあくまで見た目だけだ。

内部の4つのコイルによって加速された弾は銃口部分に常時展開している自作の魔法陣によって一番最初のコイルまで加速前の時間に加速の状態はキープしたままで戻され、また加速する。加速前の時間に戻すといってもやはりわずかな時差は発生するが、そこは計

算済み。トリガーを引くと銃口部分の魔法陣の展開が止まり、タン
グステンカーバイトとコバルトなどの合金である超硬合金の弾丸を
射出する。

なんという化け物！

試射したら森の一部が無くなった。アテナに殴られた。とりあえ
ず時差を大きくして威力を下げておいた。

第10幕 力とは（後書き）

さて、今回とうとうチートの本領発揮、の前準備。

起動言語のイメージは前からあったんですが、設定広がり過ぎて私の手に負えるかどうか……

EMLは私の趣味です。コイルガンは試しに作ってみてパチンコ玉が脛に当たって泣くほど痛かったです。

どうも新しい作品の構想ばかりがまとまる。こっちのアウトラインはだいぶ前にまとまっているんですが、いかんせん書きにくい。あと10話程度進むと書きやすくなるんですが……

次回こそ町に進出します。風斗君の意外な弱点が明かされる、かも……

次は早めに書きたいと思います。時間が取れればの話ですが。cameでした。

第11幕 死神推参（前書き）

やっとここここまでこぎつけた、みたいな達成感。どうも、月刊c
ameです。

なんというか、もう、夏休み 休み〓夏みたいなの？休んでないです
ね。

では、本編どうぞ！

第11幕 死神推参

おかしな威力の近未来兵器を作ったりしたある日の午後。

アテナとクロがパソコンの画面を見て絶叫し、黑夜がニコニコしながらそれを眺める姿を見て少し怖くなったその次の日。

あれから250年。

……そう、250年である。

何をやっていたか？ それを聞くか？

……鍛練だよ！！

神力って地味に扱いづらい。手足のように動かせるようになるのには時間がとてもかかった。精密機械のごとく動かすようになるにはもつと時間がかかった。

で、色々分かったことがある。

神力が電気なの、自分だけだった。アテナは風、クロは圧力、かな？ 多分だが。とにかく、それぞれ力が違う。

あと、魔術とか本格的に頑張った。魔力の糸で精霊集めれば何でも出来るとわかった。そこからは調子に乗ったね。魔法文字なんて開発したりして、（魔法陣に刻み込まれてる奴なんだが、実はまだこの世界8種類しかない。）楽しく研究してたわけだ。

「貴様らは完全に包囲されている！大人しく出て来い！」

「アテナ、そういうえば起動言語アクセスまだ試してなかったんだが、せつかくモルモットが来てくれたんだ。人体実験してくる」

「落ち着いて！流石に対人戦であればまずい！」

そしたらいつの間にかこんな状態なわけだ。何が起きたし。簡単に説明しよう。銀ピカの鎧集団に囲まれた。300人くらいいるんじゃないか？

「貴様等には帝国領への不法侵入、及び第二皇子誘拐の疑いがかかっている！おとなしく帝都まで連行され、そこで裁きを受けよ！」

裁きを受けること前提か。そして第二皇子しっかり守れよ。

「めんどくさい」

【物語の終わりとともに、黒き衣は我を優しく包んだ】

両手に持った？双刀の死神？が紫電を帯びる。起動言語によって解放した状態の？双刀の死神？の効果は「最大まで神力が充填された状態にする」ことだった。

扉を蹴破り、構える。

「……捕捉、ぶち抜け、『刈り取る者』！」

？双刀の死神？から放たれた稲妻が放射状に広がる。咄嗟に避けたものが数名いたが、多くが煙を上げる肉塊と化した。

「残りは……30人程度か。遊んでやろうッ！」

後に残るは、血の跡のみ。

1分もしないうちに片付いた。もう命を奪うことにためらいがない。神力仕様ですね、分かります。

「さて、一人だけ残してあげたわけだが」

「ひ、ひいっ！い、命だけは助けてくれ！なんでもする！」

「なんでもする？ならば死ぬ、今すぐ死ぬ、ここで死ぬ。……と言

いたいところだが、帝都とやらまでの道を教えてもらおう」

「あ、あと身ぐるみ全部置いて行ってね！」

「随分と可愛らしい山賊がいたものだ」

風呂上がりか？まだ髪が少し湿っている。香りのいいシャンプーの香りが心地よい。

作務衣の上に羽織っていた黒いマントを肩にかけてやる。

「そんな恰好で外に出ると湯冷めするぞ？」

「あ、ありがとう……」

「構わん。さて、と」

目の前で震える男に微笑む。

「帝都とやらに、行ってみようじゃないか。売られた喧嘩は買う主義なんぞでな」

牧歌的な景色を楽しみつつ、帝都へと進む。よく考えれば拠点の本の中に地図あったかもしれないが、あそこの本、何故か未来のまですて入ってるからな。信用ならん。

ん？ 生き残りの銀ピカはどうしたって？ いま地下室で緑色の液体に浸かっている。何、死んではいないさ。

「なあ、アテナ」

「何？」

「前から気になってたんだが」

「うん」

「何故茨の冠？」

アテナと茨って何一つ関係ないだろう……。せめてオリーブならまだ分かるんだが。

「ああ、これ？ゼウスの糞爺がさ、「お前頭から出てくるとかふざけんなし、滅茶苦茶痛かったんですけど。お前も痛くなるべき！」とかいって押し付けてきた。ちなみにこれ被っていると背が伸びないんだよね……」

「それは……ご愁傷様」

というかそれでいいのか世界神。餓鬼っぱいなおい。

「さて、ここが」

「ウィーストン帝国、帝都」

「ウエスタニア」

高い城壁、そこからのぞく山の如き城。

首を洗って待っていたまえ、王家の諸君。その首が、鎌に捉えられる時は近い。

「……風斗？まさかここの帝国」

「ああ、潰す気だ」

「うわー……」

……まあ、まずは拷も、尋問だ。

第11幕 死神推参（後書き）

おめでとう！ウィーストーン帝国の王家は死亡フラグを手に入れた！
皇帝って王家になるんですかね？ 皇家？ 皇室？

次回はちょっと遅くなりそうです。

……読んでる人いるのかな、これ。 まあ自己満足なので構わないんですが。

感想とかもらえると嬉しいが came です。

第12幕 出会い、これから進む道、護るもの（前書き）

……やっと、終わった……ッ！

時間の空気が超常的に少ないのが問題でありますな。反省。
とりあえずまだ忙しくて不定期更新。

第12幕 出会い、これから進む道、護るもの

「は、離せえ」

「やかましい、ちよつと黙れ。……で、アテナ、やはり」

「うん、間違いないね。この子を狙ったみたい」

赤の布地に金の装飾、一般的に貴族や王族が着る服を着た餓鬼、
もとい少年を脇に抱えながら、アテナと短く言葉を交わす。
どんな状況かというと

「で、この馬鹿どもはどうするよ」

全身火傷と切り傷に覆われた大量の盗賊、の死体に囲まれている
状況だったりする。

「うーん、首だけ王のところに持っていけば報奨金貰えるんじゃない？」

「帝国だから皇帝だろう」

というか元々ちよつとだけ潰す気があったんだけどな、この国。
冷静に考えてみると何故あんなこと言ったのか分からん。

「帝王だったらどうすんのさ」

「……盲点だった」

肩を落としてうなだれる。意外と悔しいのだよ。

「我が皇室は皇帝だぞ？」

「……勝った」

「下らなッ！　すぐく下らない！」

下らない？　馬鹿を言うな。正直この世界の方が下らんよ。いつになったらアリスとやらと出会うことになるのやら……。

ああ、そういえば自分が0番目になるのか？　むむ、時間というのは存外に難しい……。

さて、こんなことになった理由を説明するには、この難しい「時間」を1時間ほどさかのぼる必要がある。まあなにかといえあればあれだ、回想ということだよ。

空まで届くとはいかなくともそれなりに大きな門を見上げる。

シャルル・ド・ゴール広場のエトワール凱旋門が確か49.5mで、十分パリの象徴となっていたわけだし、かなり立派な門だろう。これが恐らくここ、ウエスタニアの入り口だ。

「というわけでアテナ、早速不法侵入だ。飛び越えるぞ」

「ラジャー、って、何故に不法侵入さ！？」

「ふむ……何故かと言われれば、あれだよ、気分」

人間、気分で動くのは非常に重要だ。気分というのは本能に非常に近い。つまり本能的に嫌だと感じるものは感情でも嫌だと感じる。今回俺はこっちの方が楽しいと感じたわけで。

それを伝えると、殴られた。

「それ単純に不法侵入の方が楽しいからじゃない！」

「黙れ合法貧乳。楽しい以外に何がある」

「あ、言ったなッ！　もういいもん、帰ったら黑夜に勝手に棚の下
のレモンの蜂蜜漬け食べてたこと言いつけてやるんだから！」

「許可は取ったが？　しかも、そんなこと言うならこの間自分でこつそり夜中にピザ食べた拳句皿割ったこと言いつけるぞ？」

「何で知ってんのッ！？」

さて、ここの外壁を通り超えれば……。

思いっきり跳躍、約40mほどか。そのまま壁を越え、スラム街へ着地。

「ちょ、ちよつと待ってよお！」

「待たん」

ふと正面を見れば、紅い生地に金色の装飾を施した、貴族風とも言おうか、そんな服の餓鬼が走っていた。

スラム街で貴族の子供が遊んでいるはずがない、とすると考えられるのは家出か

「誘拐、といったところか？　答えがぜひ欲しいな、そのお兄さんよ」

こつそりと先ほどからあの坊やを見ていた甲冑を着た男。盗賊、には見えないな。

「……人攫いではない、とだけ言っておくぞ不法侵入者」

「まずいな、ばれてたか。アテナ、正規ルートから侵入してくれ。目印は赤と金色の坊やだ」

「ラジャー！」

アテナを正規ルートから入らせる指示を出し、そして屈伸運動。

「なあ、お兄さんよ。俺とて、無益な殺生は避けたいのだが？」

「ならさつさと出て行ってもらおう。この剣の錆にならぬうちにな」
なるほど、国の衛視か何か。なら、あれは国の要人の子供か、
或いは王族か。

「ふむ、死ぬのは遠慮したいが、出ていく気もないな。ならやることは一つ、だろう?」

にやりと笑って、続ける。

「では、さらば!」

神力で発生させたプラズマで目くらましをし、そのままさっきの坊やを追いかける。まあ、逃げるともいう。戦う? 「冗談じゃない、無益な殺生は避けるのだよ。」

「ッ! ま、待て! 糞、魔術師だったとは……」

待てと言われて待つやつは逃げないだろうな。そう思いながら、走る……。

「さあて坊っちゃん、そろそろ大人しくしてもらおうか?」

少年を囲む盗賊、いや、傭兵崩れの群れ。わお、大分むさ苦しい。

「黙れ! 我がウィーストン帝国の名にかけて、貴様らのような人間の屑を相手に降伏なぞするものか!」

「ほお、言っじゃないの。まあ、すぐ何も言えなくしてやるけどな」
「坊やはなかなか顔がいいし、そっちの趣味の貴族に売り飛ばせばいい値がつきそうだ」

なかなかのグッドタイミング。まさにヒーローだ、胸糞悪い。

「その辺にしておいたらどうだ？ 人間の屑、だったか？ すまない、そんな醜い顔の生き物を見たことがないんでな。本当に人間の屑だか判断はつかんのだが」

「だ、誰だ手前は！」

「誰だと言われれば、そうだな……。仕事の都合上、？^{ツインクリムリーパー}双刀の死神？とだけ名乗っておこうか」

厨二病と言っなけれ、この世界では精神的に高揚すれば魔術の威力が上がるのだよ。オーバーキル？ 知るかそんなもん。

「なめやがって……」

「ちょ、ちよつと待て、今のどこになめているという判断材料があった！？」

「少年、その辺は気にするな。苦勞人になるぞ」

「う、うむ、分かったが……でも分らん」

なかなか肝の据わった少年だ。平然とこっちの目を見て話しかけてくる。

そつえば困まれた時も啖呵切ってたな、カッコいい。

「さて……、導け、『魂の天秤』^{テンバランス}」

「あ？ 手前、何を……がつ、く、はあ……」

むさ苦しい傭兵崩れが膝から崩れ落ちる。崩れるで掛けたつもり

は少ししかない。

「悪人は全員死ぬらしいぞ」

テンバランス

『魂の天秤』の効果は、魂に刻まれた罪悪が多い者は即死し、少ない者は傷がいえると言うもの。少年の傷が癒えた事から見て、罪を犯して逃げたわけではないようだな。

「なんだその魔術は？ 聞いたことがないぞ？」

「驚かないんだな」

「私としては君が死なない方が驚きだよ、月火」

「意外だな、死んでなかったのかアテナ」

「……悪人の自覚は無いの？」

むう、二人揃って相手のことを悪人だと思っていたのか。

「まあいい。で、お前は誰だ、少年？」

この時、この少年に名を聞かなければ、きっとこの国を拠点にすることも、そして多くの人と出会うこともなかっただろう。

「む？ 吾か？ 吾の名は」

きっとこれは偶然で。“夢”の力も、運命も、世界も修正力も関係なく。

「ローゼン・トライム・ディ・ウィーストーン。ここ、武と栄誉のウィーストーン帝国の第二皇子だ！」

それでも、後に思い出してみると、少しだけ、この出会いに運命

を感じたのは確かだ。

ただ、今この時点では、

「あ、馬鹿、このスラム街でそんなこと言うと……」

皇族だなんてばらすと、恨みのある連中が集まってくるわけで、とても運命なんてものは感じる暇はなかった。

「お前が……皇族……死ねエ！」

「お袋の敵ッ！」

「親父を返せ！」

「皇子、お逃げください！」

「おお、随分と遅い御到着で、お兄さん」

一瞬で場が混沌としたものになってしまったが……。まあいい。

「とりあえずは……御片付け、つてな！」

皇子君を脇に抱え、ツインクリムリーパー？ 双刀の死神？ を逆手に構える。

「アテナ、援護！」

「ラジャー！」

とりあえず、今は、目の前の敵に集中する。その意識が頭を支配していた。

まさか、後にこの餓鬼の為に戦う羽目になるとは思ってもいなかったが、

「にしても頭の回らん坊やだな、このスラム街なんかで堂々と皇族宣言されるとは思わなかった」

「わ、悪かったなッ！」

「ああ、悪いぞ、反省しろ。まあ、今はお説教は無しだ。お掃除中だからなッ！」

意外と、悪くない。そう思いながら、自分は片手の？死神？を手に獲物に斬りかかっていた。

「クク、さあ、次はどいつだ！」

「……うわあ、風斗、楽しそう……」

「元からそういう手合いではないのか？」

「風斗は研究職だよ。運動神経は悪くないけど」

うん、悪くない感覚だ。護りながら戦うというのは。

第12幕 出会い、これから進む道、護るもの（後書き）

というわけで皇子君登場。今後重要な人物になっていきます。

月一更新。いや、もっと少ないか。反省です。

ところで、友人に、「もうオリジナルでいいと思うんだ、うん」と言われてしまいました。

試験的に、原作粹消してみようかな……？

次の更新は早めになると思います、やっと色々な役職から退役できたので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5039q/>

Alice in dream world 死神の風に吹かれて

2011年11月15日02時42分発行